

R910.33-F637



1200500767857

R910.33
63



始



327. 8

R910.33
F63

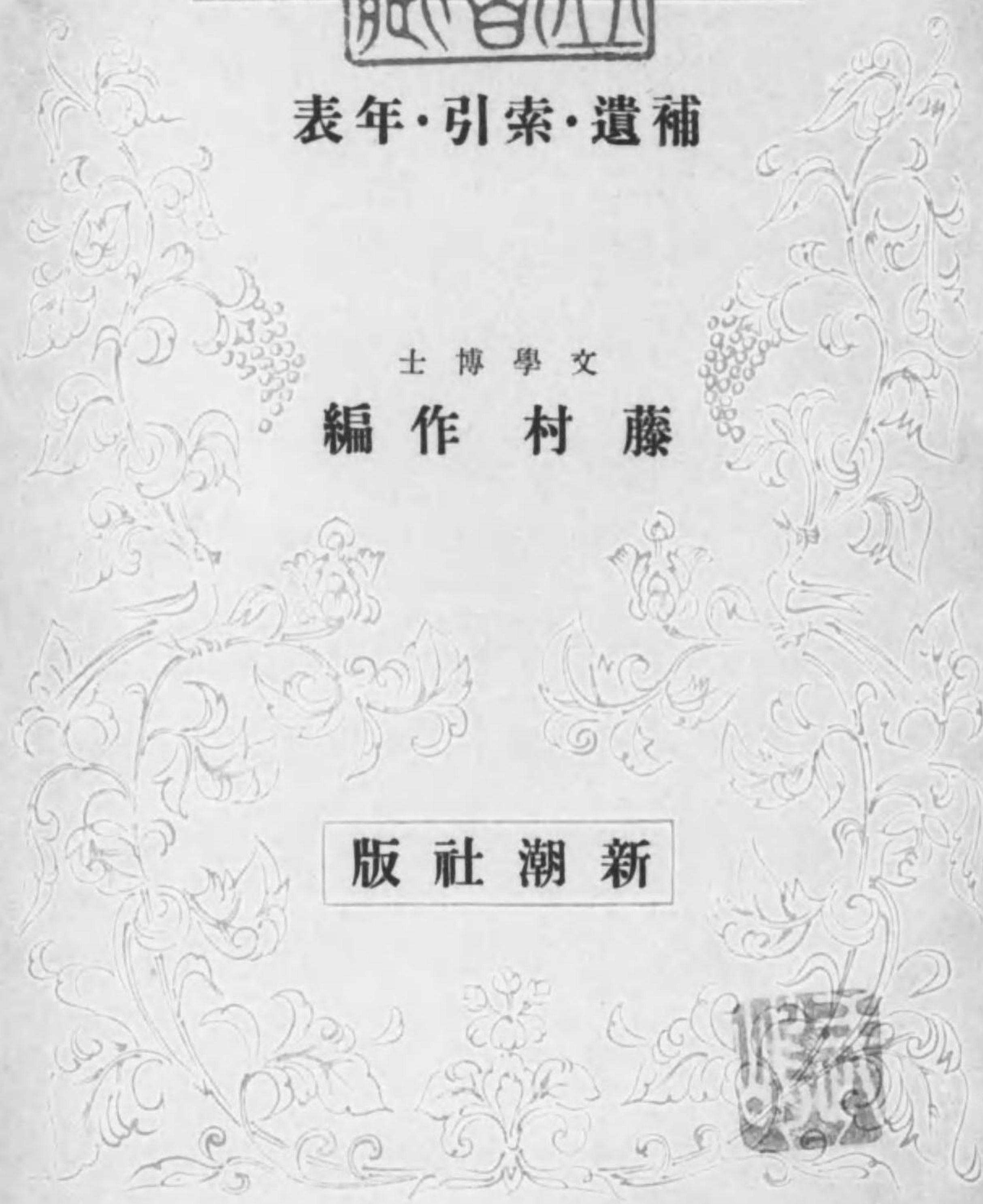
日
本
大
辭
典
學
年
表

表年·引索·遺補

文 學 博 士

藤 村 作 編

新 潮 社 版



目次

補遺 一三

索引

總索引 一六

難訓索引 一七

假名索引 一八

歐文索引 一九

年表

日本文學年表 一六

年號索引 一七

年號一覽 一八

顧問
早稻田大學文學博士 坪内逍遙
東京帝國大學文學博士 上田萬年
名譽教授



日本文學大辭典

(補遺)



明治 佐 明 大 明 佐 治

同人となり、普通茶の通を以て出来た政治研究會の創立には、最も重要な役目を果たした一人であつた。「文藝雑誌」(別項)の創刊にも異なり、その理論的指導者として、一時は全プロレタリア文壇を率ひ、後に前衛藝術家同盟と分裂しても、なほ「文壇」派の理論的指導者として今日に及んでゐる。著書には、「解放の藝術」(戦後期の文學)、翻譯にはレーニンの「資本主義最後段階としての帝國主義」、リャヂノフの「マルクス・エンゲルス傳」等が有名である。

れた論文「調べた藝術」の提唱は、資本主義の全的構構の把握の急務を最も著明的に表現したものであつた。ついで別項の論文と云はるる目的意識論は、プロレタリア文學が自然成長のまゝに委ねられてゐることを警戒し、藝術運動の領域に、實踐的理論的積極性を導入しようとしたものである。ただ惜しい事に、當時、彼の翻譯してゐたレーニンの政治理論の機械的移入であつたことが、後に著しい混亂の端となつた。併し何れにせよ、彼が理論的指導者としての功績は、永く史上に残るであらう。

大系所載。【解説】點者の系統と點語とを中心としたものではあるが、實は雜然とした内容のものになつてゐる。上巻には先づ連歌の式目その他に關する歴史的背景があり、次いで良基以下古人の連歌傳説の連句發句から貞門の七辨仙五辨實各別項を初め、その後享保期までの俳人の發句を擧げ、次に連歌花下書在家代々と稱する系統、次に講談大系傳傳大略と稱して、貞徳以後の俳人系統を擧げ、終りに後林以來享保期までの俳人の發句を擧げてゐる。中巻には活寂の時代の俳人の發句(連句を)を主として擧げてゐるが、それを多くは、系統を示して擧げ、この間に、點者の引繼した點々の一部數種の外、各點者の句々(點者が點の點に對する點歌、點歌などといふ)の撰録率別を擧げ、なほ當時宗匠點語と稱して印刷の表を擧げてゐる。下巻には先づ判詞の代りに故事出典等を記した活寂一派の三十六番句合を載せ、次いで他國宗匠大略と稱して江戸以外の現宗匠や、その一派の發句(連句を)を擧げ、その宗匠には系統を示し、活寂一派の發句(連句を)を擧げることが多い。巻末の卜宅の跋は、以上の内容を略叙したものになつてゐる。【價値】雜然とした内容の中にも、江戸宗匠の系統を明かにする事と活寂一派の作を示す事とが中心をなしてゐるが、弘く古今各地の俳人の作を鳥瞰することも出来る。最初に擧げた歴史的背景は、主として「貞徳米代記」(別項)に據つたものらしく、その間をもその儘に擧げて居り、なほ古い時代に屬するものには正確を缺くものもあるが、活寂の直接



(句發説) 編 撰

知悉した部分のものは、大體正確と認めてよい。兎に角俳人系統及び點式や俳諧の史的考査には缺くべからざるものである。【附説】活寂は、享保二十一年に「鳥山派」甲乙二巻を出版したが、甲巻は續後編と註記してあつて「續編」の後編といふ意味である。俳諧の去來のしをり歌百首を初めに、巻式、詞實、新宗匠并に改名宗匠、「續編」に載せた以

外の宗匠の點印書や、改められた點式、俣風及び點式の變化、古來の附合高點句、當時の附合秀句、活字一紙の四季發句、(轉錄)の訂正等が記されて居り、乙巻は「觀摩序文」と題して記して居り、前年本保二十年に活字と註記して居り、その序文で「轉錄」を非難したに對しての辯駁に就いては、活字の比喩體(別稱)を批判攻撃したものである。本書には凡て轉錄の文字を用ひて居る。即ち先づ「觀摩」の序文については一句一節毎に轉錄を加へ、次いで別句高點の譯、付合不轉の譯、季なし發句の事の三項に於ては、活字の比喩體(別稱)を批判攻撃し、轉錄體(別稱)の論に於ては、「五色墨」(別稱)のために比喩體(別稱)が滅却したと云ひ、最後に「觀摩」の一集を轉錄するの解を記して居つて居る。本書は寧ろ乙巻を記すのが目的で編まれたものらしいが、甲巻は「轉錄」を併せて見ると、その多岐にわたる比喩體の本質を知ることが出来る。本書は比喩體の本質を知るべき重要な参考資料であると共に、比喩體と「五色墨」との關係を知るにも参考となるものである。(田中)

いゝる

井伊大老の死 戯曲 五幕十場 【作者】中村實蔵(發表) 大正九年四月 『早稲田文學』【刊行】 大正九年六月、天外社。現代戯曲全集(中村實蔵)に收む。外に英譯もある。【初演】 大正九年七月、市川左團次等によつて歌舞伎座に上演。同時に澤田正二郎一座も大阪で上演した。【挿歌】 【序幕】(押掛登壇) 江戸城の大廣間

高潔の面目である水戸無明父子、尾張藩藩政等が突然登壇して来て井伊直鶴に開國政策の挽回を迫る。直鶴は一代の雄偉なるものとしてこれ等の反對派を一時撃退する。兎も十三代將軍は病中、紀伊家の出の菊千代が世子として城中に居る。(二幕) (井伊邸の居間) 正妻昌子、妾等が話して居るところへ直鶴が歸來する。腹心の部下下總守、家臣宇津木、長野等が時勢を論ずるところへ、姉小路局が和宮降嫁の件をたらして来る。刺客が庭前を窺ふ。不安の裡に直鶴は「天の顔に現はれた幕屋」と、私の顔に現はれた幕屋の相と何方が先(倒れるか)天と地との戦ひのやうなものだ」と淋しく笑ふ。(三幕) (街道) 京都で捕はれた梅田源三郎、三樹三郎、吉田松陰等が軍備に乘せられ運ばれて来る。水戸浪士金子孫三郎等が忍んで見送る。(井伊家の書院) 石谷因幡守、赤倉周防守等が、所謂安政の大獄の味方書類を持つて来る。直鶴は朱筆を執つて一味に極刑を課する。正妻昌子と妾等が幼い息子二人をかかへ、直鶴に對して一味の徒黨に懇願を加へる手段を迫る。直鶴はそれを斥ける。(靜の部屋) 靜は更に手段を設けて直鶴の決心を揺るがさうとするが、却つて自分が激しい強迫感に襲はれる。突然江戸城が大火して火焔が天を染める。驟然たる不安。(四幕) (品川の渡) 水戸の浪士金子、因幡守等及び薩長浪士有村等が直鶴邸の謀議に耽ける。(井伊邸の書院) 同夜に對する。直鶴は東帯巻で後段の前に伏して朝夜に對する苦衷を告ぐ。終つて自身の實像を一首の歌を詠め、靜に持たせて想思甚極の誓約に收めさせる。そして、その夜は誰の客連の前で、快く狂言「鬼ヶ宿」を演ずる。(五幕) (井伊邸支關)

先) 上巳の節句の登壇に井伊は家族連に見送られて居る。外には季節違ひの吹雪が荒れ狂つて居る。(梅田門外) 兩合羽に身を忍ばせた水戸浪士等が、直鶴の行状を目がけて斬り込む。しばし龍圖のうちに、雪は血汐に染み、遂に直鶴の智慮も疑はれる。(井伊邸支關先) 不時の兇變が報せられて邸内騒然となる。やがて直鶴の首級が届けられ、次いで老中安藤對馬守が附問使として訪れる。雪はやみ、快晴となる。安藤は「すべて明日のために今日の事を慮るものは兇骨憎まれたり、譲られたり、はては殺されましてもしようが、しかし、愈々その明日が来て見たら、今日の事が眞實に判つて来るものだ」と述べ居る。井伊家の長官野は、輝く日輪を指して「主君の笑顔がある中にあるやうだ」と云ひ、魂は天に歸つて其處から水へに地上を照照されるであらうと、一同皆天に向つて合掌する。【解説】 作者自ら序して、「彼のシチュエーションも、彼の行動も、彼の運命も直ちに一大悲劇を演じた感じが」といつて居る。この作品は井伊直鶴の性格と運命の戯曲的表現で、作者の演劇論を實踐に移した典型的な物作とも見られる。本作が直鶴を英雄として描いたために、發表當時、世評喧嘩しく、殊に直鶴に反對の水戸藩浪士側から激しい抗議が出てその上演を危ぶまれた時、作者は劇作家が歴史より自由であらねばならぬと主張して、この作品が作者の今日までの幾多の戯曲のうちで、最も長篇の力作であることは疑を容れない。イブセンの初期の歴史劇、浪浪漫遊記、浄瑠璃等の手法を随と入り入れて自由に編み出し、戯曲的構想のスケールが力強く大きなことが、作者の多くの劇作のうちで



飯田武郷 神道學者 通稱「守人」(生没) 文政十一年、信濃に生れ、明治三十四年八月二十六日没。享年七十四。【學歴】 平田篤胤の最後の門人で、平田篤胤に就いて學ぶ。【職歴】 氏に勸王の志を抱き、慶應三年京都に出で、權田直助、落合直亮等と新政につき獻ずるところがあつた。後専ら教育のことに従ひ、東京帝國大學文料大學講師となり、皇典講究所、國語傳習所等にも教鞭を執つた。【著書】 その著「日本書紀通釋」(別稱)は、多年の苦心に成り、「日本書紀」の註釋として最も推賞すべく、學界に貢獻せるところ亦極めて大であつた。また武郷は近世國學者の系統を引いて、明治時代に活躍した學者であるから、その學風は、精緻な中に清新な表現を有してゐる。萬葉學者としての木村正幹と共通する點がある。(田中實蔵)

池谷信三郎 小説家(生没) 明治三十三年十月十五日、東京市京橋區に生れ、昭和八年十二月二十一日勲受で死去した。享年三十四。【學歴】 鳴屋小學校を経て、大正二年府立第一中學校に入學、この間ヨナドイル、ミユセ、モウパッサン等を耽讀した。同八年第一高等學校法科に入學、同十一年東京帝國大學法學部に入學したが、六月休學して渡歐し、柏林大學に入學、法科に修業したが、フリードマンの音楽の講座を聞いたが、

た位で、芝居や音楽や舞踏などをあさつた。同十二年の震災に家が全焼したので、シベリヤ經由で歸朝。同十三年「望郷」が時事新報の懸賞に當選し、一躍文壇に出た。同年九月村山知義、河原崎長十郎と劇團「心座」を作り、築地小劇場で「三月二十二日」を上演した。また「首」を「新編」に掲げ、續々作品を發表したが、「歸りを待つ人々」「おらん人形」「歸つて来た母」「有明夫人」「誰かかなる風」など目ぼしいものであつた。脚光を浴びたもの、映画化されたものなどもある。劇團「心座」は「愛恋夫人」等があり、死後、池谷信三郎全集が友人連の手で出版された。【作風】 一口に都會的な作風といへる。都市の消費面に生きる人々の、屈託のない愛戀生活の種々相を中篇程度に器用に構成する。感覺の新鮮なモダン味と肌理の細かい手法が、自然に一種のスタイルとしての彼を作り上げた。作品としての意欲的迫力が稀薄であるために、美しいながらもどこか頼りない手觸りを感じしめる。都會風な作品に隨伴する缺點をも彼は具有してゐた。(千原)

石樽千亦 歌人【本名】 辻五郎【生没】 明治二年八月二十六日、愛媛縣新居郡橋村に生る。同二十一年七月、香川縣琴平皇典學會明道學校を卒業。同二十二年十月、帝國大學經濟會議員となり、現在はその理事である。同二十六年初めて佐佐木信綱の門に入り、短歌の製作に専念し、佛分竹相會(別稱)の編輯雜誌「心」の編輯の編輯に携はり、爾來同會の先鞭として推重されてゐる。最近「歌風」を公けした。【作風】 多年、海の事業に力を盡して来た人だけあつて、海の歌が頗る多い。理趣の歌風を

守り通して今日に及び、その調に生新さを加へて来た。よる波に立ちては崩れ立ちては崩れ是布の廣葉のざわめけるか」を一例として引きた。【伊勢や日向の物語】 (伊勢) 伊勢や日向の物語は、前代民間説話の、中味は既に失せて、ただ名目のみを存する例であらうと考へられる。現在世に知られてゐるものには、伊勢安藤郡内田村の長源寺に語り傳へてゐた一説がある。夏の日、日向國から来た旅人が、土地の住人の一人と並んで、この寺の堂の縁に寝込んでゐるうちに、魂が互に入れ替つてしまひ、雙方互ひうちひに相手の家へ還つて行く。家人が何としても水知をせぬので家に入るわけに行かず、もう一度同じ寺にやつて来て兩人並んで寝てしまひ、やつと元々の身體へ魂を引寄せたといふ。これが伊勢や日向の物語だと「和漢三才圖會」(卷七十一)には記して居るが、傳説としては目的がなく、昔話としては趣向が足りないと思ふ。この昔話の半分は古くある形で、或は外國の記録の翻案であつたらうか。昔話の國で同じ年頃の娘二人が死し、その一人は嫁あつて蘇生したが、故の身は既に亡びてゐた爲めに、已むを得ず今一人の體を借りて還つて來ると、その親たちは外鏡によつて、これを他人の娘としか看ることが出来なかつたといふ話。これなどは近代の小説にも、色々にその機軸を踏襲して居るやうである。長源寺の口碑なるものも、これによつて容易に思ひ付かれるもので、ただ後段の又若き變化を見入れたといふ可笑味、若年の變化を見るのみである。さしも味に持て囁まれて有名な話とさへなつてゐる伊勢日向が、かやう

な感じの淡い熾き直式のものであつたらうことは想像し難い。日向の方では別に梅北村の「神莊神莊山崎記」なるものに、萬曆三年の社創立の折日向時は六歳の女の兒、伊勢では七歳の男の子同時に託宣が行つて、雙方の早業が中途の縣の里に於て行進ひ、同じ神旨を語りかはしたといふことを記し、これが即ち伊勢や日向の物語であると傳へるさうだが(三國名聞會)その他、これも亦久しく行はれてゐた物語の名に由つて、後に附會したものと考へられる。且原氏の「讀草」に、あなたことな一方ならぬ物語をいふものと思ふ當つてゐるかも知れぬが、それを直ちに神代卷の御女・猿田彦二神の間答より起る話だと斷するのは早い。これも或は消えたと思ふ昔話が多どどこに残つてゐて、行く／＼これ等々の變遷を無用にする時が来るかも知れぬ。話といふものの中には、以前傳説や説話のまだ活きてゐるうちに作られて、文句が面白く又簡單であるために、後まで記憶せられたものが、この外にも幾つかある。さうしてその話の興味に動かされて、もう一度これを説話又は傳説の形に戻して見ようといふ試みも、近世になつてまで屢々繰り返されてゐる。伊勢の長源寺といふ寺は、或は特になつたらう事業に携はる者の止住した寺ではなかつたらうか。「和漢三才圖會」は世説に忠實なる編述であるから、この種の研究に向つては若干の暗示である。【参考】 談話大辭典及補遺 (梅田) 【一判那】 明治二十二年五月「文庫」 幸田露伴(發表) 明治二十二年五月「文庫」【刊行】 同三十三年六月、第一小説集「葉末集」に收めて刊行。【内容】 一判那を中心とした、三つの物語であ

井上圓了



了圓上井

井上圓了(いのちえ) 思想家、教育家、(幼名) 學丸、後、圓常(圓) 市水、非僧非道...

年九月、哲學部(後の哲學部大學、今の東洋大學)を創立し、同時にその講義を一般に開放する旨意のもとに、翌年一月より哲學部講義録を發行した...

眼が藤原氏であつたので、藤原派とも稱した。通稱多識(號) 櫻亭(生後) 文化四年生れ、明治十九年没す。享年八十。...

幸崎の三夜を伴三郎に譲る。そしてこの時から小平次の名を替へた。...



(明本繪) 軍備入雲

君と敵浪との隠れてゐる笑を手に入れたが、間に紛れて若君の方は謀叛人説議の半體一角が、敵浪の方は海軍船三平實は菊地の忠臣...

大夫の調達の靈力で十枚の数が合つた。又幸崎の雲が鐵山に乗り移つたので、鐵山は自ら悪事を發く。...

亡靈との早替り等に、作者の特殊な手法を注目せねばならぬ。...

以外、殆ど一つもなかつたのを慨したの因る。同校の教師には北村透谷、島崎藤村、戸川幸田、野矢、星野天知、三宅花圃(全別項)...

やゝ長い歌六十種、中巻は短章の流行唄八十種、一種の歌に数章の歌詞を掲ぐ。下巻は...

【備考】帝國圖書館蔵「小唄集」三巻一集、東京、藤野野矢蔵、日本の小唄所載は、本書と共通の内容を有し、歌詞、歌種に若干の出入りあり、歌の順序や詞句にも可成りの相違がある。...

【備考】小うた集と浮れ草集、藤野野矢蔵、東京、大正二年大阪朝日新聞に連載し、同年十月から同三年三月までに上・中・下、續の四巻として...

【備考】子爵の弟東大尉昌重が、多大の財産と愛蔵歌江を残して死去し、昌重の兄昌胤が仲に立つて、櫻岡某の弟高昌を迎へて歌江の...

入夫とする。高昌は貞節な歌江を顧みず、蕪者上りの妾歌子を京都の自宅に引入れ、歌江が従弟の昌胤と不義の關係があるといふ歌子等の中傷を信じて歌江を放逐する。歌江は忠實な家附の女中お辰と共に、お辰の弟高昌の大阪の家に戻り、高昌の學問を待つ。歌子の妹早苗子の夫である好意な紳士金杉哲夫が、歌子早苗子等を使喚して東大尉家の権柄を諷刺し、歌江の子喜美子と虐待し、歌子の子弘を當主とするために、戸籍上の妻の名を歌江から奪はうとする。哲夫が手をかへ品をかへて歌江を脅迫するが、歌江が承知しない。喜美子の乳母お兼が喜美子の立場を悲しみ、喜美子を連れ出して大阪に逃げ、貧苦を忍んで喜美子を養育する。東大尉家の風俗と歌江の苦境が極度に立つたので、見かねた兄の東大尉子爵と昌胤が立ち、同時に弘は早苗子の實子で、歌子の生子光子との取りかへ子であった経緯を探り出した。高昌の苦心で哲夫等の奸謀は全く破れ、喜美子が正嗣となる。...

【備考】古いお家騒動の筋、そのまゝとならしい時代に持ち込んだ型の小説。割合に単純な筋ながら、喜玉・喜玉をかつきりと対立させ、一進一退する両者の闘争を、これでもか、これでもかと持つて綴つて、讀者の好奇心を煽る。それが渦巻の歌江の貞節、二人の子役を動かして、むやみに涙を揮取する作者の作風は、新鮮味を買ふべきでないが、讀者を呑んでかゝる老手を見るべきである。敵役としての金杉哲夫が、単に利慾の目的で働くのでなく、こんな闘争そのものに興味を持つて、歌子等を後押ししたといふ惡魔的性格に異色があると云へば云へる。【影印】新聞社が人氣を煽る方法として、感に感想詩歌等...

【備考】小説「渡邊雪子」【發表】大正二年大阪朝日新聞に連載し、同年十月から同三年三月までに上・中・下、續の四巻として...

【備考】小うた集と浮れ草集、藤野野矢蔵、東京、大正二年大阪朝日新聞に連載し、同年十月から同三年三月までに上・中・下、續の四巻として...

を募集し、紙面に掲載した事。渦巻・湯巻人形その他、商店とタイアップして極度の宣傳法に利用した點など、共に近代新聞小説の宣傳法の嚆矢を作つたものとして記念される。大阪毎日、菊池蘭芳の「己が罪」乳姉妹と對立し、家庭小説全盛期に、異常な人氣を呼んだ作物の一つである。【千原】

【備考】古文書、【備考】動産不動産を他に賣り渡す段文、沽券、沽却狀、賣渡段文なども云ふ。これを以て證據となし、他人の妨害を防ぐためのものである。その目付・文體及び差出書・充書の書き方、その筋の裏書きなど、大體讀取困難と相違する。而して讀取も賣學も所有權の移轉であれば、その度毎に新學文を作り、從前の本學も話へて渡す。これを手廻り文と云ふ。尤も一部分の讀取難しければ本學は渡さず、その旨を新學文中に記して渡すのである。また武家時代以後のものには、證據あると失敗せざる旨を記した所謂假段文章のあるものが多い。【伊木】

【備考】小説「渡邊雪子」【發表】大正二年大阪朝日新聞に連載し、同年十月から同三年三月までに上・中・下、續の四巻として...

【備考】小うた集と浮れ草集、藤野野矢蔵、東京、大正二年大阪朝日新聞に連載し、同年十月から同三年三月までに上・中・下、續の四巻として...

えんぶ

坂の殺人事件を、又同十四年には「心理試験」「黒手組」以上新書巻を發表し、傑出した探偵小説家としての地位を確立した。これより先き大正十三年には、大阪毎日新聞廣告部をも退き、創作に専念するに至つた。その後も、「赤い部屋」(新書巻、大正十四年四月)、「屋根裏の散歩者」(同上、同八月)、「人間椅子」(新書巻、同上、同八月)、「人間椅子」(新書巻、同上、同八月)、「人間椅子」(新書巻、同上、同八月)、「人間椅子」(新書巻、同上、同八月)、「人間椅子」(新書巻、同上、同八月)...

でも最も作爲多く、殊に所謂合理化的目的の片よつてゐるものとして、耶穌教圏では通例敬して遠ざけられてゐるが、日本のやうに近世頭りに傳説を補修改造した國では、これが或る時代の標識を保存して来たといふ點にも價値があり、また文章によつてその時代の解體を固定して置かれたといふことも、不便であるがそれ以外の變化を防ぐ功績はあつたのである。一例をいふと宮城野原田部の白鳥明神様は、社家が江戸時代の初めに吉田家の入と相談して作つたものと、その少し以前に別當寺で書いたものと二つあるが、前者はその精神を日本武尊としてゐるに反し、寺のそばではこれが用明天皇の「山路の宿」の事蹟となつてゐる。双方共に今一つ以前の尊神流儀の物語を敷衍したことは同じだが、これらによつて今日の傳説の、變化して来た経緯だけは知れるのである。口碑は勿論多くの場合に於て、繰起以前のものを保持してゐるが、なほ時としてはこの第二の繰起よりも、更に数歩を進めてゐるものがある。それ故に假に自由に過ぎたる變遷が加へられた場合にも、全然繰起を参照の外に置くわけに行かぬのである。繰起の文學には定まつた型があつて、特にその進化の痕を究める必要もないが、體系としてはこれを二つに分つことが出来る。その一つは即ち前代の型と近いもので、筆鋒の當時世上に傳はつてゐた風説中、神威傳説を顯揚するに足るものを編纂するを以て目的としたもの、他の一つは即ち専ら創建傳依の由緒因縁を述べようとしたもので、假にこれを進歩式とも名づけることが出来る。これによれば大體その繰起を讀む人の種類も察せられ、從つて繰起作成

の趣旨も窺ふことが出来るのである。尤もこの説式の方にも、大抵は動向の始を説いてゐるのみならず、單なる由來記風の繰起は多くは後期の所産であるだけに、模倣類型に流れてゐるが、なほ口碑蒐集者の立場から見ると、興味は却つてこの後の方に豊かである。神威の襲撃は何れも世間話(俗話)で、即ち實事蹟の形を取つてゐる。假に神威傳説の種を混入し易く、たまに前代の民間傳説の姿をかへて再現してゐるものもあつても、これを元に戻して見るとは容易でない。これに反して社寺創立の因縁を語るものは、その儘で一つの傳説であつた。即ち昔々の代に、會つて受取れるので、從つてこれが近世になつて始めて文學に綴られたといふことは、つまりそれだけ永く民間に流布してゐたことを意味し、より多く傳説としての時代色を留めてゐることを推測せしめるのである。繰起を單なる文才ある宗教家たちの、新に案出した小説でもあつても考へてかゝることは不當である。假にそれは文字を知る少數の人に、見せるがために起草せられたにしても、それと平日關係者の口にしてゐる所と吸ひちがつてゐたならば、いつかは暴露する。單に少しづつ解説を改め、もしくは弱點を補強する以上、新たな虚構を持ち込むべき機會は乏しかつたのである。尤も近世の繰起流行に誘はれて、今まで何等の言ひ傳へもなかつた堂宮に、物々しい一枚刷りを出すやうになつた例も若干はあるが、これとても大抵は諸國の最も高名なものに採つてゐるから、文藝の作爲を以て我々の繰起分類を紛亂せしめる場合は存外に少い。繰起文學の主要なる記述

が依然として示現影響の初度の奇蹟を説くに在つて、それが夢想の獲得とか、水中出現とかの四つ五つの場合に限らるゝのみならず、その外形にも亦大凡そは定まつた様式があるのは、事によると昔傳以前、久しく行はれてゐた語りごとの面影も、一部はまだまだこの間に保留してゐるのかも知れない。【田中】

【著者】末松謙澄【成立・刊行】著者が明治十九年十月三日、東京神田一橋第一高等中學校講義室でした演説の筆記である。當時の演説の原文は時事新聞には、十月六日から十八日まで、「美術新報」には第三十六號から三十八號まで、「演劇改良論」として何れも連載された。これに著者が修正を加へて、十一月文學社から刊行された。後當年の他の改良論などと共に、明治文化全集第十二巻(文學部)に收められた。【内容】明治維新による急激な改革運動が、日本の演劇にも無自覺無反省な改良熱を及ぼし、當時の最高階級を網羅して明治十九年八月、演劇改良會の設立を見、その趣意書は八月六日「歌謡傳新報」誌上に發表されたが、會員の一員たる末松謙澄が、東京大學文學會のために演説したものが本論である。舊來の陋習を改め、開演高尚な演劇を造るために、まづ劇場建築を西洋風に改造して演出法、興行法の總てを改め、作者に知識を求めて戯曲を知的文學的に價値あらしめよと説いてゐる。同會員の外山正一が、これより早く「演劇改良論私考」と題して出版し、意見を公表したが、その主旨と趣きはない。これ等は、今日に於ては殆ど問題にならぬまでに無理解なものであるが、演劇そのものを識らず、日本演劇の特殊相を理解せぬこと等の大なる缺陷が根

昭和六年刊 ○小笠原島新報附録二冊頁九
年刊 ○(編輯) 支那文壇一冊(昭和十年刊) ○言
語一冊(昭和十九年刊) ○(譯) 復讐機一冊(昭
和二十五年刊) ○(譯) 日本時局一冊(昭和七年
刊) ○(譯) 印刷術一冊(昭和十四年刊) ○石版術一冊
○伊香保志(昭和十五年刊)。

【著者】 學界に於ける業績として第一に挙げ
ねばならぬのは「言海(別題)」の編者である。
「言海」は著者の生涯の過半を費した苦心の結
晶であるが、その組織に於ても内容に於ても、日
本辭書史上に一時を畫するものであり、爾
後の國語辭書の模範となつたものである。第
二は「讀日本文典(別題)」の著作である。本書
は著者が二十餘年の苦心を経て出来たもので
あるが、本書も亦明治時代に於ける國文典の
最高權威であり、洋式文典を應用した中古文
典としては、當時比肩すべきものなく、日本
文法學上に寄與したことも、實に甚大なものが
ある。著者は口語法の研究に心をこめて、
國語調査委員會編纂の「口語法」の骨子を作つ
た。これ亦學界に大なる寄與をなしてゐる。
又「口語法別記」に於て、語法の歴史的地理的
考察を試みたのも亦注目すべきである。

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

少年の時、漢籍を教へられたが記憶力に乏し
く、忽ち忘れやうな有様であつたので、母
の勧めで草双紙を読み、これに頗る興味を感
じ、次に軍談を読み、更に平田篤胤、本居宣
長の國學に關するものを読むに至つたとい
ふ。慶應二年十七歳の時、新設田澤銃隊に入
り、長岡城攻撃に参加したが、明治元年官軍
に投じた。明治三年(二十一歳)、新潟縣學校に
入學し、翌年同校句讀講義を命ぜられた。次
いで教職講習會、郷社勸導社に奉職した。次
が、明治八年(二十六歳)、神戶に新設同校に
入學し、翌年卒業。山梨縣師範學校に
奉職し、同十年茨城師範學校に轉任、
水戸に移つた。同十七
年、同十七
年、同十七



大矢透 大矢透 大矢透

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

六年五月愛知新聞社の短編小説募集に應じて
「淫なき路」を投稿、一等に當選したことがあ
り(一年一月発表)。同七年二月、中村屋の推薦
によつて短編小説「影」を「早稲田文學」に發表
して、それが出世作となつた。同十年上野文壇
界記者會に於て、流傳、譯々洋書に誘惑を感じ
たが、吉江高松氏に阻止された。同十二年、
朝の報、盛にコント(別題)を提唱して、その方
面の作を發表したが、後、新人生派の主張に
傾き、更に轉じて、ヤ、デカダンの傾向から、
所謂近代派的傾向に移つて行つた。その間大
正十四年四月には、雑誌「文壇日本」を創刊し、
また雑誌「不問」の同人にもなつた。昭和四年
、中村武藏大氏等と共に相模原に映畫會
社を設けたが忽ち失敗に終つた。【著作】 「知
識」 「淫なき路」 「影」 「長篇小説」 「青春」 「巴里」 「聖火」
「作風」 「人情家」 「正義派」等、さうして懷疑的
で、容易に解決の見出されさうもない問題と
懸念に取り組んで、その混亂する世相の裏に
超時代的な良心の道を探めようとする人生派
的な一面と、コントに没頭して近代派の明る
さ輕快さに傾かうとする一面とがあるが、本
質的には前者により多く著實づけられてゐる
と思はれる。兵衛生活の問題、共產黨員父子
の悲劇など、いろいろの問題を取り上げて來
てゐるが、最近の作品には、殊に愛憎の情に
に切り込んだものが多い。時には單なるエロ
チズムとか、デカダニズムとかいふ世界を
通り越して、何かもつと死物狂ひの氣味悪い
執拗さを感じさせぬではないが、感情的表現
が在外平面的で、寫實派が勝ち、藝術的高潮
に達せぬ通俗性がある。(片)

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

【著者】 國語と國文學(昭和三〇七) 遺傳記 ○明
治の國語學と大槻博士(村八良) (明治文化叢書
三〇四) ○大槻博士のことと後(明治文化叢書
三〇七) (編輯) (昭和三〇七)

お竹大日 傳説「解説」江戸で
お竹大日如來の傳説があつたのは、文化十二年の春のことであつたが、この時始めて佐久間家の忠孝竹女といふ話を聞いた者も、これを近世實在の人物と信じて、讀んで傳記を書き、又は繪を板にしてゐた。大田圓山人の「話一言」(増補)には、佐久間氏の菩提寺は淺草の善徳寺で、その墓地に延寶八年五月十九日、某々信女とあるものがお竹の石塔だらうと云つてゐる。お竹昇天の奇蹟には誇張があるにしても、少くともその事件は江戸に起つたものと信じてゐたのである。ところが、この「世間話」なるものは、實は古來の民間説話の、一つの流傳形式に過ぎなかつた。都人が昔話を囁き新話題を變し、所謂ほんの事だの世間話を編み出した結果、往々にして昔話が後者の衣を被いで、足りない場合は補充に補ひ出でてゐる。お竹といふ女中らしき名前はいつ始まつたか知らぬが、兎に角話だけは可なり古い頃の東北産であつた。他處の舊事を記した「善徳寺菩提」(卷一)に、桃生郡小野村の村長の家の神女、忠孝にして慈悲の心深し、己は血衣を食してこれを眞實の者に施した。病みて命終る時、全身より光明を放ちて飛行し去る。其行方を尋るに西北の森の中に其女の木標落ちてあり、其夜夢の告あつて神に榮る。村長が子孫は今に榮え、祭禮の日には此家に神輿を迎へて木白の上に一夜宿る。もと主従の縁ありしより此の如しとあつて、異なるはただ大日如來でなかつたことだけで、ある。青森縣八戸の昔話として、奥南新報(昭和六年七月十九日)に掲げられたのは、昔々或る家の飯炊女、洗しの口に袋を下げて飯粒を控しく流さず、拾ひ集めて鳥類などに施した。

或る時一人の旅僧が来たので、自分の貯へて奉化したところ、その旅僧は弘法大師であつた。洗し口の袋を見て深く感心し、汝は腹い腹をしてゐるからこれで磨るやうにと、法衣の袖の布を切つて賜はつた。それでこすると果して美しい女となり、主の食慾な女房は、その布を借りて毎日こすつたら、段々に馬のやうな顔になつたといふので、これはもう粉ふ方なき昔話である。他の地方にも多分この系統の説話は求むるに難くないと思ふ。美濃の藩木長者の娘といふのも、落ちこぼれの飯粒を集めて池の魚に施し、後に幸運長壽を得た話になつて居り、今一つ開れば、山城聖徳寺の蟹に助けられて大蛇の毒を治れた少女なども、平生食物を蟹に施してゐたことになつてゐる。飯粒といふことには單なる勤儉貯蓄以上に何か呪術的の意義があつたかと思ふが、近世はこれを忘れてゐる。さうして賢女狐の一例に採用しようとしたのであつたが、これには結末の昇天化佛が、幾分か對き目を引かぬ。

落合直澄 國學者「通稱」一平
【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

【落合直澄】天保十一年武蔵國多摩郡駒木野村に生れ、明治二十四年一月六日歿。享年五十二。【墓所】東京小石川窪田谷墓地。【簡歴】直澄は落合直亮(兼文)の弟で、兄と共に國學を志す。明治二年神祇官志が篤かつたが、明治元年官軍に屬して下野に於ける職に功勞があつた。明治二年神祇官津波社司、出雲大社少司馬等に歴任し、次いで宇都宮の神宮教本部長になつた。明治二十二年皇典講究所の講師になつたが、後、病を得て歿した。

か

我觀 雜誌「解説」大正十二年九月の大觀雜誌「日本及日本人」(別項)が事情あつて一時休刊した時、同誌主筆の地位にゐた三宅實徳は、十月十五日に至り、中野正剛等と新雜誌「我觀」を創刊し、毎時時事評論、感想文その他を執筆した。創刊號誌上にその宣言を掲げて、「歐洲の神話に風風(フエニク)は自ら身を祭壇に焼く、灰燼中より若き姿を以て出現すとあり。幾多の冒險機關が帝都の焦土と化すると共に、我等の思想發表機關は、新基礎の上に出現するの適當なるを認む。新

たなる雑誌は我輩と稱し、新たな社は我輩社と稱し云々」とある。後、大正十三年八月に...

片岡健兵 小説家。岡山県田原郡芳野村等に生れた。...

婚した。昭和三年二月、藝術の貧困を、中央公論に發表、左翼的傾向を示して文壇に波紋を投じた。...

象にもなる。例へば、香山権現堂、助の京内匠、龜山嶽の赤堀水右衛門、「天下茶屋」...

大郡河村に生れた。田邊中學校にて同盟休校を煽動して退學され、和歌山中學に轉じて卒業。...

【著者・成立】序文によれば、源現行が藤原定家の家集「拾遺集」(別題)を清書する際、假名遣ひを定めようと思ひ、を・お・え・ま・ひ・い・る・ひ、の八字の使用法を記して、定家に見せたところ、申す所、悉く其の理相叶(なり)と云つて合點した。...



(本 版 古) 遣 字 文 名 假

【著者・成立】序文によれば、源現行が藤原定家の家集「拾遺集」(別題)を清書する際、假名遣ひを定めようと思ひ、を・お・え・ま・ひ・い・る・ひ、の八字の使用法を記して、定家に見せたところ、申す所、悉く其の理相叶(なり)と云つて合點した。...

本によつて校正したものである。【内容】前記「を」から「ひ」までの八條、「は」から「ふ」までの六條、合せて十四條に分けて、それら八條の假名遣ひの用字を羅列してある。...

いづれの篇につき定めたるか畢竟なし」と云つてゐる如く、この説も必ずしも認め難く、平安朝末期以後の用例に基づいたものではあるまいかと考へられるが、また決定しがたい。...

の間に社會主義思想に刺戟され、個々フランヌから歸朝した同郷の小牧近江と相識するに至つて、その他の同志と共にプロレタリア文學運動の機關誌「種語(くさ)人」(別題)を興した。...

一段(今日の上二段に當る)中二段(上二段)下二段(加行格)依行格(依行格)依行格(依行格)...

大政、中之芝居。座本淺尾徳三郎、頭取榮輪台藏。【役者】東京在東之演劇三郎、後藤八郎、三吉...

【譯本】東京帝國大學研究室藏寫本。帝國圖書館藏寫本(但し六ツ目録)。お家狂言集(日本戲曲全集)所載。義太夫節の正本(外題)...

の槍に突かれる。さて出入の商人小松屋宗七は、股の金三千兩を船乗の兄小平治の船で送還する事になつてゐた。...

【六幕】(小平治住居)小平治は弟の跡を追うて出奔した千草姫を匿つてゐる。小倉玄右衛門が弟手に向ふ。...

【譯本】日發堂藏(改定文庫版)水上瀧太郎。【初演】安政六年二月五日、江戸市村座。三月十日禁止。...

居となり、現在に至つてゐる。その増補の著しいものは、義太夫節に入つた「忠臣蔵」...

【譯本】東京帝國大學研究室藏寫本。帝國圖書館藏寫本(但し六ツ目録)。お家狂言集(日本戲曲全集)所載。...

【譯本】東京帝國大學研究室藏寫本。帝國圖書館藏寫本(但し六ツ目録)。お家狂言集(日本戲曲全集)所載。...

【譯本】日發堂藏(改定文庫版)水上瀧太郎。【初演】安政六年二月五日、江戸市村座。三月十日禁止。...

に入つた。折柄其世の鈴の音が聞える。【解説】この作者は「南門風」(風傳)各道場、品川橋蔵「五大方」で深川橋蔵、本書及び句ひ巻、「後編香ひ借」で吉原橋蔵を試みてゐるが、品川橋蔵で非常に精緻な穿ちを試み、同時に「句ひ巻」でこれを吉原に試み、哀傷の通言體(「通言」)の強に迫らんとする概を示してゐるに拘はらず、本書自身で近來の洒落本が穴を穿たんとし、却つて邪徑に陥つてゐると云ひ、何等通を云はず、單に滑稽描寫に終つてゐるのは、作者の本意に對する諷刺か、或は「轉化せんとする傾向を示したのか、容易に断定し得ぬが、この作者が絶えず變つた題材を採つて、新しい方面に進出せんとした努力は認められる。但し本書は天狗俳諧を創作中に挿入した點に新味が存するだけで、傑出せる作品ではない。(山崎)

開巻詩「海客」を見よ。

詩聖ダンテ「神曲」評書【著者】上田敏全集第三巻所載。【解説】二十八歳の時の撰述で、雑誌に發表した諸論文に補正を加へ、これに新に執筆の論文を加へたもので、本文三十七四頁七章から成る。内容は一般の讀書界のために難解な「神曲」の構構を解んとして、要領を述べて讀められたダンテ研究史手引書とも稱すべきものであるが、本書に於ては「神曲」が生れた背景をなすダンテの關係、「神曲」の解釋に資すべき諸問題及び

「神曲」の梗概の三項目に就いて詳細に説き盡してゐる。各章の辨別は順に從ふと、首章「わがダンテ」は、まづ筆を伊太利ゴデスタ館所蔵のダンテの肖像の事起し、次章「わがダンテ」の形骸は、青年期の詩人の學識發展の跡をたづねてゐる。「神曲序説」は「神曲」紹介の體序にあたるもので、全篇の批判を試み、殊に「神曲地獄界の二編」の章の如きは、著者生來の天才的文藻と藝術様式に對する感傷性を以て書かれ、その練達な文章に讀すべき名文句に満ちてゐる。更に「神曲」中の自然描寫を「神曲秘説」は二百頁から成り、全篇中の中心を占める一章であつて、初めに「神曲」の由来、題目、詩形等の細目に互つて周到なる論述を究め、終りに百頁に餘る「地獄界」「淨土界」及び「天界」を併せて百歌の略解を練られた。且つ本書がダンテ研究書としての最初の傑出した貴重な文獻であることも特記せねばならぬ。【附記】上田敏は明治四十四年文藝委員會に於ける「神曲」翻譯の事業を委嘱せられ、文藝用語に苦心する所があつたが、稿成らずして止み、その一小部分の遺稿は、未定稿のまま「ダンテ神曲」と題して大正七年京都から刊行された。(山崎)

自然美論

【著者】吉江喬松【刊行】大正十二年十月、春秋社。【内容】人間生活と自然、原始と古代人の自然、古代及中世紀の自然、近代人の自然、浪漫主義の自然、象徵主義の自然、現實主義の自然、海洋美論、山岳美論、生ける自然の十章から刊行された。(山崎)

地蔵經由來

【著者】久米正雄【刊行】大正六年八月、中央公論。【解説】作者の譯撰の戲曲集中に收められてゐる。「上演」大正八年二月、明治座で井上正夫一座が初演以來、大小劇團によつて幾十回となく脚光を浴びた。(山崎)

「死と其の前後」

【著者】久米正雄【刊行】大正六年八月、中央公論。【解説】作者の譯撰の戲曲集中に收められてゐる。「上演」大正八年二月、明治座で井上正夫一座が初演以來、大小劇團によつて幾十回となく脚光を浴びた。(山崎)

たもので、「山の神々」では金倉連が神に扮して村人たちを欺き、遂に神々の怒りにふれて石にされることになつてゐる。(山崎)

仕立卸薩摩上布

【著者】三代河竹新七(通稱)菊野殺【刊行】明治二十五年九月、歌舞伎座。【解説】豊田八右衛門(五代上布五郎)、徳島縣菊野十兵衛(上布五郎)、浦田八右衛門(上布五郎)、米津半之助(大和屋長兵衛(河竹新七))、那智半之助(河竹新七)、徳島縣菊野十兵衛(上布五郎)の薩摩上布三郎の薩摩、河竹新七(八右衛門)等。

題材由来

【五大方】薩州家のお留守屋役浦田八右衛門の菊野殺し事件を、所謂實録そのまゝにこの編で、西洋一編の「狂作書」記載の傳説に據つた。主役を演じた五代菊野五郎が大阪から歸東後、間もなくのこと、大阪土産として運ばれた。三編目の船中にて立腹を切る趣向は、三代菊野五郎の演じて好評を得た白井權八の大井川の立腹を借用したものと傳へられてゐる。

「序幕」

薩州家のお留守屋役浦田八右衛門を初め、都築半六、城山丹波、豊田八右衛門等が、出入商人錢屋長兵衛の招待によつて、大阪北の新店の遊女屋櫻屋(へ)へ来り、遊興してゐるが、肝腎の華人の調染の遊女が病氣のために菊野といふのが替りに出る。ところが菊野は、善兵衛の伴の善次郎と深い仲なので、善次郎と言つて菊野も從はず、善次郎も菊野を想ふ、善兵衛は息子の不埒を責めて勘當するが、菊野は申譯に自害せんとする。それを女傭ひで通つてゐた八右衛門が知つて留め、これが機縁となつて菊野に想ひを掛ける事となる。(二幕)勘當された善次郎は、大和屋

重兵衛夫婦の言葉に従つて寄食し、菊野と逢引をしてゐる。八右衛門は菊野を大和屋に呼び續けてゐるが、善次郎に義理を立てて歸せしない。そこへ附け入つて大和屋夫婦は手切金を五十兩出させて自分等が歸する。八右衛門は家老より命を遣はれて竹田近江製作の計の代金二百兩の大幣を運ぶために使ひ果し、且つ菊野への懇望は遂げられず憤死する。【三幕】時計の買取に就いては、家老の深い情によつて切腹の必要もなく解決したが、大和屋重兵衛夫婦に取られた手切金の穿鑿と菊野に對する恨根とから死を決して投書を決意し、夜陰に乗じて櫻屋に忍び入り、菊野を初め大和屋夫婦その他を斬殺し、船に乗つて淀川に運ばれたが、捕手に追ひ詰められ、立ちながら切腹して相果す。

【解説】菊野殺しを扱つた作では、無類「五大方」編が最も傑出してゐるが、その後明治以後に及んで「輪船櫻屋」(置土庚今織上布)等の名題で、實録によつて脚色されたものが上演された。本作もその一つであり、最もおもしろく出で、傑出した作といへないが、一般によく知られてゐる。(五大方編参照)

【参考】「死と其の前後」初演當時の回想日記(山崎)「支那語」世界の言語の「一」【解説】東方アジア及び中央アジアに互る中華民族の領域内に住む三億乃至四億に及ぶ支那人の用語である。この外語大なる支那語は、殊に海峽殖民地及び北アメリカの西部にも用ひられてゐる。地方による言語の差異が甚しく、多くの方言にわかれてゐる。やゝ廣い範圍に行はれる共通語としては官語がある。漢字を以て言語を寫し、その上に發達した文語が統一の言語として行はれてゐる。これは口語とは可なり相違があるが、近年は口語に近い白話文が次第に勢を得てゐる。支那語は古く日本・朝鮮・安南に傳はつてその文語として用ひられ、又これ等の言語にも少なからぬ影響を及ぼした。

【参考】「死と其の前後」初演當時の回想日記(山崎)「支那語」世界の言語の「一」【解説】東方アジア及び中央アジアに互る中華民族の領域内に住む三億乃至四億に及ぶ支那人の用語である。この外語大なる支那語は、殊に海峽殖民地及び北アメリカの西部にも用ひられてゐる。地方による言語の差異が甚しく、多くの方言にわかれてゐる。やゝ廣い範圍に行はれる共通語としては官語がある。漢字を以て言語を寫し、その上に發達した文語が統一の言語として行はれてゐる。これは口語とは可なり相違があるが、近年は口語に近い白話文が次第に勢を得てゐる。支那語は古く日本・朝鮮・安南に傳はつてその文語として用ひられ、又これ等の言語にも少なからぬ影響を及ぼした。

電。學生時代は學費に窮して赤本の編纂を書いた...

に失敗、第三高等学校に入學した。偶々高島...

【批評】よく、やくざ者を書く點では長谷川伸...

一様式の名稱。この主義は立體主義・オルフ...

俊明(カミヤ) 國學者【姓名】山岡氏。字は...

象山



【姓名】動王家・漢學者・洋學者【姓名】佐久間氏...

唱へられてゐるので、それに従つた。【生徒】...

て儒學を依歸一書に研び、傍ら有識の士と交...

正倉院

【名稱】正倉とは最も主要な倉の義...

たもの、何時か判らないが後世建て續けて...

【所在地】奈良市東大寺大佛殿の西北奈良御...

【勅封】北倉と南倉とは東大寺の庫中...



正倉院(明治初年御開闢の景)

【勅封】北倉と南倉とは東大寺の庫中...

【勅封】北倉と南倉とは東大寺の庫中...

【勅封】北倉と南倉とは東大寺の庫中...

える。梅雨には晴れやうに晴に通した四文...

大陸文學 文學論【解説】これは...

高田實 俳優【本名】藝名に同じ...



高田實の死後遺照

高田實 俳優【本名】藝名に同じ...

高田實 俳優【本名】藝名に同じ...

たり、横若町の市村座に始めて東上した山口...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

【俳諧】「花の夢」雲のひびき「村田松風」...

○具都和開考○諸般日記考註補遺○源氏物語不傳書○宇津保物語不傳書

田中實太郎 小説家【註】
曾て徳業と號した。【附】明治十三年三月二日、高知縣長岡郡三井村に生れた。十三歳、船大工の徒弟として住み込んだが、十八歳、漢學の力ある點を認められて小學校の代用教員になった。この頃特に文學書に親しみ、時には懸賞小説を書いて新聞雜誌に投書した。明治三十五年高知實業新聞社に入社。三十六年上京、人民新聞校正部に入つたが、ストライキを起して職を失ひ、大府桂月の門に入り、三十七年印刷の機關が發して郷里に歸り、「武選」「未亡人」などの連載ものを地方新聞に書いた。再び小學校教員になつたが、四十年五月上京、郷土の先輩幸徳秋水や奥宮健之を知つてゐた所から、大正事件後は暫く刑事に尾行された。大正三年初めて「中央公論」に中間論物を書いて東郷文壇にデビューし、ついで書いて「新新新聞」の「唐人殺し」などは非常に好評を得た。同十二年春文壇に漫遊したが、翌年三月再歸。歸朝の後四年、東京電氣會社の囑託となり、昭和四年から大府・東日の新聞に「長風時代」を載せて断片的の好評を得た。著書の主なるものは、この外に「情史」「情史全集」などがある。【批評】所謂中間論物を今日のやうにジャーナリズム必備のものとした努力に於て、彼は先づその功を村松梢風と分つたのがあつた。そして彼の作品がそれを漸次に發展させて、小説に變化して来たものに、純理想派の大衆小説よりも、よく史實に就き、その研究が綿密である。なほ大衆文學の取材を明治初期まで開拓して来たのにも先鞭をつけた。作は

世相と情痴を描くに特に秀で、たとへば「風時代」に描く人物、三條、岩倉も、板垣も、山内實業も、情痴の繪巻物の中に照見してゐるのは、英雄主義誇張の多い大衆文學に於ては、他に類例のないものである。又作者が比較的漢學の素養を持つたために、見馴れぬ文字を驅使することも目立つ。結構の上から云ふと多少散漫である。【本誌】

谷初音 小説家【註】
『牧逸馬』を見よ。
『谷初音』(人名) 内題に谷の初音とあり、又後編の内題には「数」の音とある。谷初音とは谷中の伊呂波茶屋を背景とした作となる。【刊行】前編文政九年。後編文政十年。【口傳】『春書英笑』(諸本)「数」の音として人情本刊行會本に収められてゐる。【題材】谷中のいろは茶屋を背景とする作は、洒落本に「世説新語茶」の類がある外、少くも、人情本に於ても、本書の外、谷中の月(下)や主人(文政十一年)があるだけで、取材の方面から見ても、

れど、お幸はその意を推量して柳に風と受け流してゐる。そしてお幸は由次郎の批評で死んで見せようとするので、彼の心は自らお幸に傾き、これも亦捨てられぬ女となつて了つた。お幸は今我儘が出来なくなり、遊里の控に背き、同僚の客をとつた事が露見したら、お幸は又お幸に老人の客がついてゐて、身請をする云ふ噂を聞いて、自分と切れる積りで無理を言ふのであらうと疑ふ。お幸は彼がお幸に未練があるので、自分と切れたがつてゐるのであらうと疑ひ、互に口説き合つてゐるの附言に、お幸が一心とゞき祖父に逢ひ苦を語り、由次郎と婚約をなして先祖の家名を相続するまで後編にあらはし、近々出版仕掛とあるから、その腹案であつたらうが、後編迄では解決し得なかつたのである。【構想】『風時代』に属する人情本で、谷中の同場所の情調と、私娼の間に起つた戀の意地とを描いたものとしたもの、後世の人情本の如く高中心の人々の素性は主人公由次郎の外説明してない。洒落本が長篇化せんといふ作品の部類に属する。泣戸の折動が、相方の遊女のとき妻に似た事を語つて泣き出し、無意識に妻に似た點をあげて相方のあら探しをやつて怒らせる可笑味、坊主客が酔に乗じて隣座敷に暴れ込み喧嘩になる滑稽さなど、洒落本の系統を引いてゐると同時に、「読者毛」などの影響を受けてゐる事は疑はれない。主人公以下の客が職人であり、背景が同場所であり、通人としても低級であるお幸の気分が、かなり表現されてゐる事は本書の一特徴である。【山崎】

し後世の二條派に比較すると、敘景歌も多く、句法も自由である。「續拾遺集」に自選したものの中から選ぶと、
をりはへておになきくらすの影の夕日もうさき
一風のおくでの朝雲色よきてかりは影さ秋の山
かき
これなどがその代表的歌調と見なしてよいものである。【藤原】

【参考】公卿家傳○扶桑名實傳○公卿補任
【爲相】歌人【姓氏】藤原氏、冷泉家の祖。【別號】藤原、また高倉【生没】弘長三年(九八三)に生れ、嘉祥三年(九八八)七月没。享年十六(嘉安五年)に云ふ異説もある。【家系】藤原定家の孫。父は爲家、母は遠江守の女で安嘉門院四條御母。【関係】藤原爲家の第三子、爲家はこの老後の妾に生れた爲相幼時は爲相と書かれたを寵愛した。三歳にして從五位下となり、それより歌物の修業を積んだ。早く門人に、藤原(藤原)長海を得たことは注意に値する。嘉元元年(一一三一)の「嘉元百首」は、前年の「元元百首」と共に彼の聲名を強固ならしめた作品であつたらしい。延應元年(一一一九)の参議に任ぜられ、正二位權中納言に昇つた。父の没後、長兄爲氏との間に播磨國細川莊の相続問題が生じたことは、母爲家として阿蘇と稱したの「十六夜日記」(前掲)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて有名である。最初、爲氏は嫡子として、父爲家より細川莊及び近江國吉富莊を譲渡されてゐたのであるが、爲家が老後の末子爲相を溺愛するあまり、一度爲氏に與へた細川莊を奪つて爲相に與へたことが論争の起因をなしてゐる。爲氏は世中、よくこの抗争を續けたが、その子爲世の時代に至り、遂に敗訴の決定を得た。【撰著】續後拾遺和歌集(別項)○新和歌集十卷(撰著一五二所載、別項)○平家打御新式集(別項)以後の歌人百八十八人の作品百七十七首を編んだもの、部立も勳撰集に從つてゐる。別名は爲氏が爲家の關係から守部宮に行つてゐた事があるに依るものとも思へる。【参考】藤原爲相家傳・續古今集・續後拾遺集・新後拾遺集・風雅集・新子載集・新後拾遺集・新後拾遺集・新後拾遺集・新後拾遺集

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて有名である。最初、爲氏は嫡子として、父爲家より細川莊及び近江國吉富莊を譲渡されてゐたのであるが、爲家が老後の末子爲相を溺愛するあまり、一度爲氏に與へた細川莊を奪つて爲相に與へたことが論争の起因をなしてゐる。爲氏は世中、よくこの抗争を續けたが、その子爲世の時代に至り、遂に敗訴の決定を得た。【撰著】續後拾遺和歌集(別項)○新和歌集十卷(撰著一五二所載、別項)○平家打御新式集(別項)以後の歌人百八十八人の作品百七十七首を編んだもの、部立も勳撰集に從つてゐる。別名は爲氏が爲家の關係から守部宮に行つてゐた事があるに依るものとも思へる。【参考】藤原爲相家傳・續古今集・續後拾遺集・新後拾遺集・風雅集・新子載集・新後拾遺集・新後拾遺集・新後拾遺集・新後拾遺集

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

【爲氏】歌人【姓氏】藤原、二條家に屬する。【法號】覺阿【生没】貞應元年(一一〇九)に生れ、弘安九年(一一八六)没。享年七十五。【家系】藤原定家の孫である。父は爲家、母は宇都宮三郎重盛生母藤原藤原女。【関係】爲家の長子として歌道の家の教養の中に育つた。建長三年(一一三三)参議に列せられ、重んぜられるところあつたらしく、長く現職に就いてゐた。やがて大納言に昇り、冷泉大納言と稱されてゐる。弘安八年八月、その官正二位權中納言で出家したが、その翌年に示寂した。一生の功績として特に擧ぐべきは、「續後拾遺和歌集」(別項)を撰定したこと、集中には自作二十一首を自選して加へてゐる。異母弟爲相(別項)との間に、播磨國細川莊を争奪し合つたことは、爲相の實母阿蘇尼(別項)の「十六夜日記」(別項)によつて廣く世に知られてゐる。保平問題は永仁年間(一一一三)に再起し、爲相は機軸に下向した。かくて將軍守邦親王、北條高時に命じ給ひて、十九年後、即ち正和二年(一一三二)の判決を得て爲相の應許を見た。この遺領問題は尙も前後四十三年に亘つたもので、爲相の被つた苦悶のほど思はれるが、關東の雰圍氣は彼の文學に

特に、良寛和尚、扇屋和尚の名を一般的にする一つの役目を演じたものであり、同時に茂吉の和歌に對する考を具體的に吐露したものである。

【解説】 小説「作者」小栗風葉【發表】明治四十二年一月「中央公論」。

【挿話】 昨夜酔ひつづつて寝てしまつた山田村屋が、三百圓の借金を催促しに來てゐるのを思ひ出すと、歸る氣になれず、そのまゝお喜代といふ女を相手に酒盛りになつて二日も居つてける。次の日、或る雑誌の記者が原稿の催促に來る。今日は是非歸つて原稿を期日までに届けてくれと山田に二十圓を渡して行く。その金で又酒を飲んで泊つてゐる所へ探して來た木村屋が尋ねて來て、留守中の山田の家庭の話を聞かされ、いよゝ歸らうと決心する。そこへ山田の書生が、子供の病氣が危いと知らして來るので、木村屋と一緒に家へ歸り、子供や妻にいろ／＼と言いつつ、翌日山田は、知人や雜誌社を騙つて、やつと調達した百圓を木村屋に渡す。木村屋はお腹で料理屋へ山田を案内する。山田はその歸途、お喜代のある料理屋に轉げ込み、また酒盛りの日が續いたのであつた。

【解説】 だらけ切つた一作家の耽溺生活を、寫實的に書いた作品。一流の才筆で巧みと快讀せしめる。田山花袋の評語に、巧みと快讀したといふだけで、他に何等の意味を見出すことが出来ない。作者は自ら耽溺と謂つてゐるけれども、實は耽溺ではない。近代人の耽溺は、今少し捨身なところ、皮肉なところ、反抗的なところがある。ただ酒と女とに耽溺してゐる事ではないとあるのは、當時耽溺と

いふ新語が作家達の考察の中心となつてゐたことと對照して意味が深い。しかしこの作が「編み込み」などと共に記憶されるべき作品であることに異議はない。

ち

【小ざき者へ】 小説「作者」有島武郎【發表】大正七年一月「新潮」【刊行】有島武郎著作集及び有島武郎全集所収の外、現代日本文學全集第二十七巻に採録。

【挿話】 父は深夜の書齋で、隣室に眠る三人の愛兒に宛ててペンを執る。お前達が大きくなつてこの古臭い心持を喰ひ喰ひ、高い遠い處に、私を乗り越えて進んで行かぬが、私達夫婦の愛はお前達を暖め暖め、人生の可能性を味覺させずには置かないと思ふからこゝに書き續けて置く。七年前のひどい吹雪の朝、恐ろしい難産の末にお前達の一番大きい子が生れた。その時から生活の諸相が一變してつた。翌年翌々年と次の二人が生れたが、私は心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐながら、何一つ満足に果す仕事もせずに始終不安に悩まれていらしてゐた。そのうち妻は精神性の病氣で入院し、私は頑固な自分前達の世話をし、病氣を見知り、そして勤めに通はねばならなかつた。北海道の冬を道れて東京に歸つた後、妻の病もやゝ小瘳を得たが、間もなく病狀が悪化した。今は病の諸相を知つた妻は、全快しない限り死ぬともお前達に逢はないと、無氣な聲をきめて海岸の病院へ送られて行つた。それがお前達との永久

の別れで、妻は得難く恐れたばかりではなく、死の姿が愛するお前達の靈魂に大きい傷を殘すのを恐れて、臨終にさへ立會はせぬやうに遺言して死んだ。私は妻を病魔から救ふために、迫り來る運命を勇ましく擔ふために、烈しく闘つて來たが、妻の死に依つて自分の眞に生き行へばならぬ人の上をも忘れず、母の死はお前達の愛をこゝまで擴げますに十分だらう。愛を痛覺した私は周囲の人を淋しから救ふために働かう。お前達は私の働いた所から、新しく歩み出さねばならぬ。小ざき者よ、不幸な同時に幸福な父と母との祝詞を例にして人の世の旗に上れ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小ざき者よ。

【批評】 渺たる一短篇に過ぎない。崇高な母の愛を描いてゐる點は「死と其前後」同様と同じであるが、更に母を失つた愛兒に對する側々たる憐愍の裡に、人生を肯定して進まん側々の熱烈な意志を籠めて、一箇悲壯なる出發の宣言書として讀まれる。而もその後の狂んなる創作的活動はこれが實際をなすものであり、作者の一轉機を端的に表白せる作品として重要視せらるべきである。

【近松語彙】 國語辭書一冊【著者】上田萬年【編者】代「刊行」昭和五年、富山

の地理と天候、南三大陸の十章より成る。世界文明の推移を論じて、日本の世界文明に於ける役割を論及し、世界地理と世界歴史との綜合的提要とも言ひ得る。第一章では地理學の研究が人の精神活動に多大の關係あることを力説し、第二章では、地勢が各國の歴史を支配することを幾多の實例を以て示し、第三章には、世界の國を山國・平原國・海國の三種に分ちてその特徴を叙し、第四章では、世界の地理の上に造物者の影響が潜んでゐることを基督教的立場より力説する。第五章からは文明論に入り、先づ亞細亞大陸の地理の特徴を叙述して、西方亞細亞を以て人類の幼年期を説き、第六、七、八章は、歐羅巴の地理を論じて、そこを人類青年期の發達場と見なし、幾多の獨立國の出現をそのための必要と見、第七章の亞米利加論に於ては、歐羅巴に於て發達された人類が、その理想實行の一大國として米國を選びしことを述べ、歐洲諸民族がその精要をこの土に送りし事實を語り、現代の文化の中心としての米國の立場を明かにする。そして文明西移の大勢を論じて、將來の文明は亞細亞大陸を本土とすべきが自然の趨勢であると論じ、こゝに日本國を以て東西の文明を融合して、亞細亞大陸に新文化の領土を建設すべき使命あるものと見、以て國民の覺悟を促してゐる。本書は學理的根據に立つて、日本の世界に於ける使命を發見し論述したものと見て、また文化史的觀點に立つての世界地理論・世界歴史論、或は文明史として最初のもので、著者は本書及びその姉妹篇たる「國史談」によつて、基督教以外に、ひろく日本の學界論壇に特殊の地位を占めた。有神論的立場に立つての文化史觀とし

て、また日本民族の世界的使命を論じたものとして特殊の價値と意義とを有する。殊に爾來數十年に於て、太平洋が世界の中心となつたとする情勢に照して、この書の見聞の中心を稱せざるを得ない。

【茶狂言】 演劇【解説】 大阪の俳狂言(別題)に對して、享保の頃江戸の芝居樂屋から起つた一種の即興的素人狂言で、何かの景物を主題として趣向を凝し、仕方話或は芝居まがひで見物や笑を賣ふ體物によれば、既に茶狂言の仕方に種々ある。(一)立茶狂言。普通の狂言の如く衣裳・髪をつけ、思ひ思ひの芝居を演じて、最後に景物を披露するもので、或は狂言茶狂とも稱す。(二)口上茶狂言。扮装を施さず坐して趣向を演じ、それによつて景物を取出すもの。(三)食物茶狂言。立茶狂言と口上茶狂言との間には、その趣向の景物を魚鳥・野菜・料理等の食物に限るもので、これを俗に食茶狂ともいふ。(四)袂茶狂言。口上茶狂言の一種、細かな景物を懐中・袂若しくは背巾などに忍ばせて取出すを云ふ。(五)引掛茶狂言。俗に押掛け茶狂とも稱し、觀しき連中五六人組んで、友達の家へ押掛け、常からその家の勝手な心得て、有り物の道具を利用して茶狂の趣向を見せるもので、最も通人好みの茶狂である。

【治茶】 享保の頃、江戸芝居の三階即ち大部屋から生れた即席の餘興で、その頃芝居大部屋の部は一座三階の大部屋に集まつて茶菓を出して賑會を催した際、その香に當つた者が思ひ思ひに趣向をこらして景物を披露した所から始まるといふ。一説には、酒肴を調へる時に酒肴と稱したが、享保の頃、元祖澤村宗十郎が下戸のために専ら茶菓を景物としたので、遂に茶狂といふ名稱が確立したといふ。最初の茶狂言は悉く大部屋連中がその時の狂言の趣向をもち、大部屋の身振・白粉などを誇張的に模倣して、客芝居に即ちかやうに心がけたものと思はれるが、これが芝居外部の素人の手に移ると反對に先づ芝居の忠實なる模倣と化して、實語以降流行の素人狂言の體格となしてゐる。「古今茶狂三階圖繪」は、遺傳の消息を最もよく暗示してゐる素人狂言の體格本で、そこには趣向や洒落は毛頭見られない。賣掛期の狂言茶狂の名手として角五・里住・三階・他國・流香・藤十・一圓・白兔・如雲・金輪・陽堂・翠鬼・來道等の名が傳へられ、ついで安永・天明期には、櫻川・杜芳・山東・京傳・藤川・好町等の好人がをり、就中好町の趣向は變通自在で、同じ景物を二度も三度も見立直して用ひ、所謂二段返し三段返しといふのを始めたといふ。天明度以後進出した江戸前の茶狂の趣向は、「蜘蛛の糸巻」の中に、某茶家から傳された吉原の常盤五町の「扇の尻(木地)」なる題の茶狂が記されてゐる。更に寛政から文化・文政にかけて、江戸の茶狂は全盛を極め、その趣向は戯作にまで影響を及ぼしたが、既にこの頃から大阪(別題)が混合して、純粹の江戸茶狂と別れ、漸く離れて來た。同時期に、素人狂言は全く茶狂から分化して行つた。大阪の特色である落を茶狂にも附けるやうになつたのはこの頃からで、「十八大通」に書かれた近江屋佐平次大層屋の落の如きはこれである。當時茶狂の趣向の巧者は櫻川・藤川・藤川・式亭三馬・華屋水盛・三笑亭可樂等があつた。その後安政以後は、狂言茶狂が漸く衰へ、口上茶狂はなほ盛に行はれ、江戸

【地人論】 文明論【著者】内村鑑三【刊行】明治二十七年五月「地理學」題して刊行。同三十年二月、第二版の時より「地人論」と改題された。内村鑑三全集所収。「地人論」四六九頁、分量から言へば「小著」に過ぎないが、歴史及び地理方面にも造詣の深かつた著者の著作だけに、内容的には甚だ價値の高いものである。内容は、地理學研究の目的、地理學と歴史(國史・山國論・河平原論・海國論)、地理學と倫理、亞細亞論並に西方亞細亞論、歐羅巴論、亞米利加論、東洋論、日本

留學 九年末木某と結婚、同年十二月歸朝し...

索や描寫の沈潜性を妨げ、無産派の陣營内に...

の附巻として刊行された。これには附録とし...

みの作者と歌数とを記してある。この外同名...

【作品作風】大正五年、坪内逍遙の紹介によ...

勅撰作者部類 元盛原著 光之増補 名譽...

【附記】上記の外に、後西院天皇宸筆と推定さ...

【附記】本作は近松の技巧が頂點に達したも...

等の節狂言、二番目はその頃のはやり事など...

義輝を室町邸に擧げて就した史實と、大坂天...

刈場の領境に人相不明の女の死體が遺棄され...

【附記】本作は近松の技巧が頂點に達したも...

があり、蟋蟀の佐傳の如き正體不明の人物には...

したの古い例である。【詞章】その全文を...

【参考】日本歌謡集成(巻七) 謡曲(巻七)...

【参考】寺田實彦(てらたけ) 蘭華家【筆名】吉村...

作成。後、理學博士の學位を得た。同四十一...

天智天皇(てんじ) 淳和(じゆんわ) 五段 時代物...

【参考】日本歌謡集成(巻七) 謡曲(巻七)...

【参考】寺田實彦(てらたけ) 蘭華家【筆名】吉村...

わけを聞くと、女は身の不幸を泪と共に語つて、どんな裏長屋でもいから堅気な世帯を持てたいといつた。おもはず膝を乗り出した讀の手に、女は自分の指に嵌めてみたダイヤモンドの入った指輪を手早く抜いて與へた。そして二人は夫婦約束をした。二時間ほどの後、女は、飾を物置部屋へ連れて行つた。長持があつた。蓋をあけると中には佐々木遠堂の死體が入つてゐた。讀は一度に慄へ上つたが女は逃さなかつた。絶體絶命、女の命するまゝに、死體を古い敷紙に包んで隅田川へ水葬にしなければならなかつた。それから二日目の朝、野橋の河岸に書生體の男の死體が漂着した。その死體の左の小指にはダイヤモンドの入つた指輪が嵌まつてゐた。

【玉川】「東方萬歲」三組歪の三曲で、殊に「玉川」は名曲として知られ、今日では清元が於ても演奏しつゝある。嘉永四年頃病歿す。【四代】(本名)三ツ石里吉(生歿)嘉永五年に生れ、明治四十二年八月歿。享年五十八。【四代】初め二代目清元齊兵衛の門弟で、里壽郎と稱したが、明治十四年頃、當時本郷根津にあつた遊廓大八橋の娘に見染められて養子となり、清元を襲名した。然るに同十五年冬新富座で富本浄瑠璃の「田圃」が出るに就いて三銃手がないので、豊前太夫島原の大八橋が舞の里吉を島原屋長として出演せしめた。しかしこれはその時限りで終り、間もなく大八橋が没落したので、里吉が清元界に歸り咲きして三代目清元齊兵衛となり、明治四十二年八月、五十八歳で病歿した。(明思)

【玉川】「東方萬歲」三組歪の三曲で、殊に「玉川」は名曲として知られ、今日では清元が於ても演奏しつゝある。嘉永四年頃病歿す。【四代】(本名)三ツ石里吉(生歿)嘉永五年に生れ、明治四十二年八月歿。享年五十八。【四代】初め二代目清元齊兵衛の門弟で、里壽郎と稱したが、明治十四年頃、當時本郷根津にあつた遊廓大八橋の娘に見染められて養子となり、清元を襲名した。然るに同十五年冬新富座で富本浄瑠璃の「田圃」が出るに就いて三銃手がないので、豊前太夫島原の大八橋が舞の里吉を島原屋長として出演せしめた。しかしこれはその時限りで終り、間もなく大八橋が没落したので、里吉が清元界に歸り咲きして三代目清元齊兵衛となり、明治四十二年八月、五十八歳で病歿した。(明思)

【玉川】「東方萬歲」三組歪の三曲で、殊に「玉川」は名曲として知られ、今日では清元が於ても演奏しつゝある。嘉永四年頃病歿す。【四代】(本名)三ツ石里吉(生歿)嘉永五年に生れ、明治四十二年八月歿。享年五十八。【四代】初め二代目清元齊兵衛の門弟で、里壽郎と稱したが、明治十四年頃、當時本郷根津にあつた遊廓大八橋の娘に見染められて養子となり、清元を襲名した。然るに同十五年冬新富座で富本浄瑠璃の「田圃」が出るに就いて三銃手がないので、豊前太夫島原の大八橋が舞の里吉を島原屋長として出演せしめた。しかしこれはその時限りで終り、間もなく大八橋が没落したので、里吉が清元界に歸り咲きして三代目清元齊兵衛となり、明治四十二年八月、五十八歳で病歿した。(明思)

【玉川】「東方萬歲」三組歪の三曲で、殊に「玉川」は名曲として知られ、今日では清元が於ても演奏しつゝある。嘉永四年頃病歿す。【四代】(本名)三ツ石里吉(生歿)嘉永五年に生れ、明治四十二年八月歿。享年五十八。【四代】初め二代目清元齊兵衛の門弟で、里壽郎と稱したが、明治十四年頃、當時本郷根津にあつた遊廓大八橋の娘に見染められて養子となり、清元を襲名した。然るに同十五年冬新富座で富本浄瑠璃の「田圃」が出るに就いて三銃手がないので、豊前太夫島原の大八橋が舞の里吉を島原屋長として出演せしめた。しかしこれはその時限りで終り、間もなく大八橋が没落したので、里吉が清元界に歸り咲きして三代目清元齊兵衛となり、明治四十二年八月、五十八歳で病歿した。(明思)

な

直木三十五(なほぶみ) 小説家【本名】植村宗一、また宗一と書いた時代もある。【生歿】明治二十四年二月十二日、大阪市南区内安堂寺町二丁目生まれ、昭和九年二月二十四日歿す。享年四十四。【開眼】家業は古物商、横岡幼稚園・同小学校を経て、育英高等小学校卒業後、市岡中学に入った。試験の時、監督教師から答案の字が小さいと云はれ、翌日は指へるほど薄紙を持ち行き、一枚に一字づつ答案を書いて出したと云ふ奇談を殘してゐる。【日本及び日本人】矢野龍溪の「新社會」幸徳秋水の「神皇正統記」などがこの頃の愛讀書だつた。明治四十三年中学を出ると奈良縣の田舎で代用教師を務めた。同四十四年上京、早稲田大學文科に入學、月謝未納のため卒業證書は得なかつたが、大體その課程だけは履んだ。學生時代から美術に興味を持ち、美術記者をした事がある。大正八年知人と春秋社を設立し、自ら主となつてトルストイ全集を刊行した。別に雑誌「新潮」を創刊。春秋社にゐる時から冬夏社をも經營して後に分離し、雑誌「人間」(別冊)を出した。又三上於菟吉と共同で元泉社なる出版會社を作つたこともあるが、多くは失敗であつた。三十一歳時事新報に初めて月評を書いた時から直木三十五

十一の筆名を用ひ、爾來、年輪と共にその筆名の數も一つづつ加へたわけだが、三十五に到つて留めて了つた。大正十二年「文藝春秋」の創刊と共に、その雑誌にあつて辛鬱なる諷刺とゴシップを飛ばし、一時文壇を震憾せしめた。震災と共に大阪へ轉住、同十三年一月から「音楽」を創刊して「心中雲母坂」以下十種の化物語を連載した。それから映画にも手を染めて「聯合映演藝術家協會」を興し、文藝映畫の製作に力を注いだ。昭和三年、由比根元大教授に「週刊朝日」に連載し、初めて鮮やかに作家としての存在を劃し、同五年「南國太平記」が大坂毎日、東京日目に連載されるに及んで、盛名の頂點に達したといふ。現代小説にも筆を染めて「青春行狀記」を書き、競争小説を試みて「日本の職權」なども書いたが、これは歴史的大衆文學ほどの盛名は呼ばなかつた。同八年書きおろし全集を計畫して半ば以上完成した時、宿願の肺結核、春體カリエス、神痛等が一時に重つて來た。それでもなほ文藝院の設立を企圖してゐたが、病には勝てず、同九年二月二十四日水歿した。著作は「直木三十五全集」に纏まつてゐるが、有名なのは「南國太平記」を第一とし、「淨瑠璃化仇討」「源九郎義経」などがある。【業績】大衆文學を知識階級の嗜讀にまで引き上げ、その内容や品位を向上させることに非常に貢献した。文壇がこの方面にまで着目して來たのは、殆ど彼一人の功績とさへ云へるであらう。作品は玉石混濁だが、その最も傑出したものが大衆文學の最高峰を劃し、間々純文學の域にまで迫つてゐる事否か難い。古文獻のパラフレーズ、人間の氣持の裏づけ、心理の起伏などに妙を得てゐるが、波瀾の點

が、後に富本に入つて三保時長助となつてゐる。然るに天明三年八月に至り、常磐津兼太夫の三銃を勤めてゐた岸澤古式部が、三日目から大病にかかり、出動不可能となつたため、里長及びその門弟の里桂が迎へられて立三味線を弾くこととなり、そのまゝ常磐津へ留まる事となつた。然るにその後寛政三年冬、再び富本に復歸することになつたが、二三年にして病歿した。作曲の名人で、彼が常磐津に關してゐた當時、作曲した曲の扉「古山健」【展覧】(別冊)等は傑作として今日なほ行はれ、また五代目都太夫一中が、寛政四年春都座で一中節再興の旗上げ興行として上演した「けいせい」清問は彼の作と傳へられる。【二代】(本名)生茂【開眼】初代の門弟で同じく盲人、里桂と稱した。天明の初年から里長に隨伴して富本に入り、常磐津に轉じたが、寛政三年冬、師が富本へ復歸した時には、常磐津に残り、姓も古澤と改め、里桂を里慶とも書き改めたが、同八年十一月に至り、二代目島原屋長を襲名した。而して同十年春に至り富本に轉じ、文政三年頃まで常磐津にその名が見えてゐたが、歿年を明かにしない。【三代】(本名)未詳【生歿】嘉永四年頃歿。【開眼】江戸の人、初代岸澤八五郎初代佐々木市藏の孫に當り、後に岸澤市藏から二代佐々木市藏となつた人の門弟で岸澤古市といふ。文政九年正月、二代岸澤八五郎となり、天保十一年正月、師が佐々木姓を名乗ると共に佐々木八五郎となつた。後、師の歿後、同十四年に清元に入り、清元八五郎と名乗つたが、爾三年で家元岸澤太夫と衝突して同流を脱し、三代目島原屋長と改めて弘化三年秋富本に入る事となつた。この時土産として作曲したものが

【玉川】「東方萬歲」三組歪の三曲で、殊に「玉川」は名曲として知られ、今日では清元が於ても演奏しつゝある。嘉永四年頃病歿す。【四代】(本名)三ツ石里吉(生歿)嘉永五年に生れ、明治四十二年八月歿。享年五十八。【四代】初め二代目清元齊兵衛の門弟で、里壽郎と稱したが、明治十四年頃、當時本郷根津にあつた遊廓大八橋の娘に見染められて養子となり、清元を襲名した。然るに同十五年冬新富座で富本浄瑠璃の「田圃」が出るに就いて三銃手がないので、豊前太夫島原の大八橋が舞の里吉を島原屋長として出演せしめた。しかしこれはその時限りで終り、間もなく大八橋が没落したので、里吉が清元界に歸り咲きして三代目清元齊兵衛となり、明治四十二年八月、五十八歳で病歿した。(明思)

同上○夢殿昭和二年、改造。

中田嘉右衛門 脚本作者【別號】「生殺」未詳。但し一説に元文三年段といふ。【附歴】俳優から轉じたといふ。...

水網 有職家【姓】藤原【法號】蓮阿彌。貞治年中の人。評傳未詳。【著書】...

中西悟堂 詩人【附歴】明治二十八年十一月、金澤市に生れた。東京に出て、天台宗及び曹洞宗中學校を経て二三の專門學校や大學に學んだ。...

永行 有職家【姓】藤原【法號】常水【生殺】未詳。正三位水經五世の孫。...

新居格 評論家【附歴】明治二十一年三月九日徳島縣海部郡海田に生れた。...

虚無思想とは著しく異なるものがあり、新居イムムとも稱すべき彼一流のものである。...



新居格の肖像

他の米國船に乗り、喜望峯を廻つて慶應元年八月ボストンに着いた。日本を出てより一年餘である。...

はデビスであつた。かくて上野榮三郎・中島力造・元良勇次郎等が次々に入學し、明治九年...

の多の部に「暮れはつる年のつもりをかぞふればむさしの春も近づきにけり」とあるから、...

は、文治二年(一八四六)から建久九年(一八五八)に及んで、彼女の従妹丹後(後)は宜成門院の女房であつた事實もあるから、これ等を綜合して考へると、二條院に仕へた謂は、院の崩御にあつて一旦里に歸り、後鳥羽院の御代再び上つて宜成門院に仕へたものであらう。建仁元年には、三月二十九日の新宮御歌合、八月三日の影供歌合、八月十五日の御歌合等に引きつづき参加してゐるが、この年行はれた空前御歌合も評すべき大規模の歌合千五百番歌合にも百首の歌を留めてゐる。建保四年には百番歌合が行はれて、それにも彼女の名が見えてゐるが、これが現存歌合中彼女の名が見える最後である。彼女に戀人のあつたことは推測されるが(愛恋)、正式の結婚生活をしたか否かは明かでない。「玉葉集」によると、伊勢國に於ける彼女の所領に關して紛争が起り、そのため自身で逐々鎌倉に下つて將軍實朝に訴願し、首尾よく目的を達した。

【作田】家集「二條院御歌集」(建仁二、七、九、寛本)として其内百首を採録し、二、本、都考に一本載せられてゐるは大體治承年間まで、その前半の作と思はれるものを百首収めてゐる。併し彼女の特色を示すものは寧ろ正治二年院御百首(建仁三、八、中)に入る百首、千五百番歌合(建仁四、大、中)に見える百首等である。勸修堂に入つた歌は、千載四、新古今一、六、新古今一、三、續後撰三、續古今六、續拾遺二、新後撰四、玉葉八、續千載四、續後拾遺三、新千載二、新拾遺三、新後拾遺一、新古今四の合計七十三首である。歌合では右掲の千五百番歌合の外、別冊社歌合(建仁一、八、八、民部卿歌合(建仁一、八、九、三、百六十番歌合(建仁四、〇、〇、新宮御歌合(建仁一、九、〇、影供歌合(建仁一、九、〇、御歌合

世上、人間世の稱呼があるが、それは文學上の殊性を指すものではなく、編輯者と交友關係にあつた定運を名づけたに過ぎない。即ち里見等當事者の外に、國民文藝會に縁故ある文士、小山内薫、久保田万太郎等の一團を意味してゐた。因みにこの雜誌の後期の經營に當つたのが、當時出版業者であつた直木三十五であつた。

の

野村胡堂の『小説家』(本名)長一【別號】あらえびす【附註】明治十五年十月十五日岩手縣紫波郡赤松村に生れた。父が江戸時代から明治中期へかけての文學書を集めてゐたので、その感化で十歳前後から猛烈な讀書癖に陥つた。明治二十九年郷里の小學校を卒業して盛岡中學に入り、同三十一年頃より根岸派の俳句に親しみ、傍ら石川啄木等と文藝運動を起した。中學卒業後醫科大學を熱心に勤む父との間に意見の一致を缺き、二年間放浪の後、同三十七年第一高等學校佛法科に入學、同時に文藝に關する興味を失つた。同四十年東京帝國大學に進んだが、同四十三年父を喪ひ、家政整理のため半途で退學した。同四十五年報知新聞社に入り、政治部記者として政黨關係の記事を支持したが、その筆文及び新味のある人物評が世の注目をひき、大正三年「人間雜誌」を主宰した。同四年報知新聞社部外刊主任となり、一切の創作批評その他の筆を絶ち、同七年渡米、同九年刊主任に轉じ、同八年社會部長となり、同十一年

は

調査部長兼編輯部長となるに及んで、科學小説「二萬年前」を新聞に連載し、續いて二三の科學小説を發表した。昭和二年、新聞人としての第一線を退き、編輯局相談役の閑職に就いて始めて大家小説の筆を執つた。その出世作とも言ふべき「奇談クラブ」を書いたのが四十六歳の時で、以下「勇男特」(身代り被三)、「三萬五十三次」(萬年平)等を相繼いで新聞に發表し、一方、雜誌に「左門日記」(新奇談クラブ)、「萬五郎青春記」(風流活人劇)、「新奇談クラブ」(錢形平次捕物記)等の長篇及び數十の短篇を發表した。外に、夥しき少年少女の讀物を書いてゐる。またレコードの蒐集家として知られ、あらえびすの別號によるレコード音樂批評は斯界の權威とされて居り、「パワハからレニューベルトまで」の著書もある。

【批評】多年新聞人として苦勞して來た作家だけに、その日々の興味をつないで行くことは手に入つたものであり、文章はよく構が整ひながら、一紙の清新味と、そこはかとなくエロチシズムとが感じられる。但し極めて讀むと結構の妙味に乏しい體がある。(木村)

の又文、朋友、大津の尙白、大阪の西鶴(西鶴、來山、惟中、萬海、六普、才廣、西崎、名古屋の荷分、横船等二十五名の點を乞ひ、その評點を公表した上、これに讀者自身の批評を加へたものとあげ、一巻から三巻までは順次點者たちの評點と、これに對する批評を掲げ、四巻には諸家の四季發句を載せてゐる。本書の如く點者の評點を公表したのは、夙く寛文七年に出た「評點小相撲」の類があつたが、本書は當時著名の宗匠を網羅し、しかもその評點の可否をさへ論じたのであるから、相當の物議を醸したに違ひない。だが公然起つてこれに對する者は殆どなかつた中に、ひとり北條國水が「特牛」を出してこれを駁した。それは自ら點者の中に加へられなかつた不満と、師西鶴に對する批評を反駁せんがためとであつたが、西鶴は別に「石車」(別號)を出して縱横に駁する所があつた。當時の俳人間の一種の暴論戰術的な論戰として興味深い。(原田)

【参考】俳諧史の研究(俳諧叢書)新編、久松義典、久松義典、小説家(本名)赤松野村、明治二十六年九月十四日岡山縣邑久部郡府村に生る。十歳父に死別し、翌年西大寺町の伊勢屋と云ふ炭屋に小僧にやられしたが、勤めの苛酷な上に居たまされず、逃げ歸り、次に岡山市の履物問屋に行つた。その頃大阪から送つてくる「商報」にしばしば和歌を投じて掲載され、その選者の許に入門しようとして店を飛び出し、はるばる大阪まで尋ねて見たら、それは下駄の鼻緒の職人であつたと云ふ珍談もある。それで再び岡山へ舞ひ戻つて林崎と云ふ炭屋に入り、夜間を利用して勉強した。日本文學史院の講義録は、

支考と婦人との不和の事に及んで婦人を持ち出し、婦人とも別居したる藩士の藩士で佐分利氏である事等を述べてある。終りに麻及及び營の語があるが、その云ふ所が積むらしい。

【批評】自見による正風俳諧の本質論で、同時に全俳壇に對する忌憚なき批判攻撃で、凡例及び本文中にも、詩評に似てゐるが信を述べた語を述べたのであると云つてゐるが如きものである。その言ふ所には誤見もあり、歴史的事柄には誤つた箇所もあり、芭蕉の語として引くものにも怪しむべきものがあり、芭蕉の句について見解も全く類例の俳人の見方で、芭蕉俳句を賞識し得ないものなることを暴露するものであるが、論として云ふ所には、類例すべきものがないでもない上に、當時の類例せる俳壇の弊所を突くものがある。この點が知識技術共に低下した當時の俳壇の一面に反響を呼んだらうと思はれる。又發聲が越人の傳統と自稱することは、彼の云ふ越人の傳記が虚説である如く虚構である事は、今日では既に明白となつてゐる事であるが、當時の俳人には多くこれが信ぜられたらうから、これが又俳壇の地歩を築くに役立つたらうと思はれる。要するに發聲の意圖が富つた譯で、後に海軍(若しくは)と共に天保の三大家とされ、或は天保四老人(若しくは)の一人と云れるに至つた第一歩が、こゝに築かれたといつてよいのである。

長谷川伸

【開題】明治十七年七月十五日横濱に生る。父が土木請負業で、父が家産を破つたため、十二歳にして早くも横濱の九州土木出張所に小僧として入らねばならなかつた。それから

苦勞の多いルンペン生活が初まり、二十歳にして横濱の小新聞社に入社、二十一歳、臨時雇ひとしてジ、パンがゼットに勤め、間もなく市川の野砲兵第一聯隊に入隊して上等兵になつた。二十四歳、陸軍と共に元の小新聞社に返り、初めて新聞物の小説を書いた。但し當時の小新聞は大新聞の挿物の版木を譲り受け、作者はその餘に合ふやうに出題目な構想を過めて行くのだから問題になるやうな小説ではない。幾時もなく伊原青々園の推挙を受けて新新聞社に入り、社會部の遊軍を勤めた。そして山野平作なる筆名で「名人由着切」を連載したが、これが時代ものに着手した最初であつた。大正十一年から「サンデー毎日」に動物の短篇を寄稿、中には「天正殺人鬼」が好評であつた。當時「新小説」は芥川龍之介と菊池寛が編輯の名義を貸してゐたので、兩者の推薦で書いたのが「作手傳五左衛門」である。原稿には支那語の慢々のをもちつて慢々亭と署名したが、菊池寛の忠告に俯いて「伸」を用ふこととした。『伸』の二字を削つて「伸」の一字を用ひた。『伸』は十数年あつて大正十五年六月に退社した。昭和五年大阪東京朝日新聞に「紅梅」を載せて噴々たる好評を博し、ついでその續編とも見られる「戸並長八郎」を載せた。昭和三年頃か、脚本時代に筆を止め、同年「職人」に發表した「書掛次郎」を初めとして名作少から、又舞臺に上演されたものが頗る多い。彼は幼時母と生別し、「捨母」として憤慨してゐたが、昭和七年漸く理屈、知人や文壇の諸家から記念會が催された。

【批評】彼の描く世界には股旅もの別名が下層に浮沈する市井無頼の徒の中に、美しい人情の閃くの好んで題材とする。徳川期の下層階級には強き弱きを扶ける任侠の精神を寓ぶ氣が多分に存し、制度づくめめ封建時代には、反抗的精神のはけ口として、あきらめてゐる生活の代辯者として、さうした物語を著した。それは講義などを通じて傳統をなし、明治から現代まで續いて来たが、彼の作はよくその傳統を損んだもので、自らも「自分でなくては書けない世界だ」と自負してゐる。この作家は短篇に巧みで、長篇となると結構に波瀾と進展とが乏しい。【本村】

【開題】近松門左衛門(興行)明和板(外題年譜)に、正徳三年七月十六日より竹本座の上場としてあるが、正徳元年板行の筑後後段物集「鶴鳴が権」にこの外題が見え、且つ本作の巻末に、寶永七年八月に開あるを當て込んだ句があるので、同年同月の興行と推定されてゐる。【評本】八行六十七字、山本九兵衛板、十行四十七字、同上七字、繪入十七行八十三字、板元不明、近松時代浄瑠璃(常國文庫)・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)・近松浄瑠璃全集及び諸種の近松全集所収【題材】源平盛衰記(義経記)二二段草子等に據る。

然とし、己が大衆を母に打明けて別を告げる。その夜舞臺は橋上に牛若を預け、却つて打負かされて主従の契約を結ぶに至る。(切、重盛小松第三) 清盛が病中の重盛を見舞ひ、己が愛用の不老不死の薬を勧めたところ、重盛はその妖術なるを看破し、かゝるものを服用した者は三ヶ年の中に火の病を受くべきを豫言する。そこへその薬を調合した鶴鳴といふ醫師が、一丈餘りの書となつて飛び失せたとの知らせがあるので、清盛は周章狼狽する。【第二】(序、清盛對峙の屋裏) 鶴井六郎が田樂賣となり、小行燈を荷つて歩いてゐるところを當盤方の女中に人達ひで呼び止まられ、當盤から牛若に遺る形見の袋を渡される。そこへ牛若の使者三太がやつて来て鶴井に袋を返せと迫る。こゝで三太が袋の中の直垂大口の襟袂を言ひ當てる節事「櫻袴づくし」があり、とゞ鶴井は牛若の家來になることを略論して買約束で袋を三太に返す。(切、鳥羽の里藤原德義茶屋跡) 平家の侍時木三郎は重盛の遺言により、鳥羽三郎南を獻上し、おはす後白河法皇に、黄金三千兩を獻上しようとし、折から法皇が重盛の菩提のため願陀修行をして來られたのをよい機会と、報給と見せかけて御鉢の中に三千兩の包を入れて逃げる。そこへ德義茶屋の主人鶴井が歸り來り時木を引つ捕へたところ、それは幼時別れした眞の兄であつた。こゝで法皇は意々平家謀伐の院宣を牛若に下されたので、鶴井も弟の勧めにより牛若方に従ふこととなり、兄弟共に院宣の使を承はる。(第三) (序、三條金賣吉次店先) 馬追に身を驚した牛若が吉次に従つて奥州に下る準備のところへ、平家の侍が来て、當盤を刑場へ引く役馬を出せと言はす。

ひ

【開題】近松浄瑠璃(興行)明和板(外題年譜)に、正徳三年七月十六日より竹本座の上場としてあるが、正徳元年板行の筑後後段物集「鶴鳴が権」にこの外題が見え、且つ本作の巻末に、寶永七年八月に開あるを當て込んだ句があるので、同年同月の興行と推定されてゐる。【評本】八行六十七字、山本九兵衛板、十行四十七字、同上七字、繪入十七行八十三字、板元不明、近松時代浄瑠璃(常國文庫)・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)・近松浄瑠璃全集及び諸種の近松全集所収【題材】源平盛衰記(義経記)二二段草子等に據る。

當盤は清盛の風を懐疑したことを恥ぢて自殺しようとしたので、清盛は怒つて洛中引廻しの上で親梅津源左衛門の家の前、門前、おかけよと命じたのである。多くの馬方達は皆その役を辭つて、圖を引くことになつたところ、牛若が不運にもそれを引き當てる。(中、露の轉筋) 道行、準當盤が鞍に縛りつけられ、牛若が馬の口嚙を取つて、洛中引廻しの上前場へ着く。(切、梅津の里源左衛門の家の前) 當盤が刑に行はれようとする直前、急に産氣ついて男兒を産するが、源左衛門は源氏の敵とばかりその兒を刺殺す。そこへ産婆に化けて來た辨慶が、牛若と力を協せて轉囚の侍を追ひ拂つて當盤を救ふ。(第四) (序、矢矧の宿摩の藥師參進) 鈴木龜井の兄弟は、兼の藥師參進の同道なる矢矧の長者に逢ひ、長者の方におつた牛若の留の由を聞く。そこで、兄弟は自分達の名を名告り、且つ院宣を譲り居ることを語つて案内を頼む。(切、矢矧の長者館) 長者の一人兼淨瑠璃は牛若の笛に合せて琴を調べたのが縁となつて深き契を交す。(第五) (大切、同上) 鈴木龜井の兄弟が平家追討の院宣を牛若に渡せば、長者吉次も大に喜び、早速源と牛若との祝言を擧げる。

【開題】近松浄瑠璃(興行)明和板(外題年譜)に、正徳三年七月十六日より竹本座の上場としてあるが、正徳元年板行の筑後後段物集「鶴鳴が権」にこの外題が見え、且つ本作の巻末に、寶永七年八月に開あるを當て込んだ句があるので、同年同月の興行と推定されてゐる。【評本】八行六十七字、山本九兵衛板、十行四十七字、同上七字、繪入十七行八十三字、板元不明、近松時代浄瑠璃(常國文庫)・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)・近松浄瑠璃全集及び諸種の近松全集所収【題材】源平盛衰記(義経記)二二段草子等に據る。

【開題】近松浄瑠璃(興行)明和板(外題年譜)に、正徳三年七月十六日より竹本座の上場としてあるが、正徳元年板行の筑後後段物集「鶴鳴が権」にこの外題が見え、且つ本作の巻末に、寶永七年八月に開あるを當て込んだ句があるので、同年同月の興行と推定されてゐる。【評本】八行六十七字、山本九兵衛板、十行四十七字、同上七字、繪入十七行八十三字、板元不明、近松時代浄瑠璃(常國文庫)・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)・近松浄瑠璃全集及び諸種の近松全集所収【題材】源平盛衰記(義経記)二二段草子等に據る。

【開題】近松浄瑠璃(興行)明和板(外題年譜)に、正徳三年七月十六日より竹本座の上場としてあるが、正徳元年板行の筑後後段物集「鶴鳴が権」にこの外題が見え、且つ本作の巻末に、寶永七年八月に開あるを當て込んだ句があるので、同年同月の興行と推定されてゐる。【評本】八行六十七字、山本九兵衛板、十行四十七字、同上七字、繪入十七行八十三字、板元不明、近松時代浄瑠璃(常國文庫)・近松浄瑠璃集(有朋堂文庫)・近松浄瑠璃全集及び諸種の近松全集所収【題材】源平盛衰記(義経記)二二段草子等に據る。

風【發表】大正三年四月より「三田文學」に連載。【刊行】大正四年十一月発行。荷風全集第六卷及び明治大正文學全集第三十一巻に收む。【解説】東京市中散策記を採めたもので、「日和下駄」「淫雨」「地獄」「寺」「水戸流石」「路地」「開地」「坂」「夕陽」「富士眺望」の十一章より成る。作者が日和下駄をばき、編纂者と嘉永版の江戸切繪圖を手にしながら散歩した記事であるが、一面各題目を機軸として東京の自然及び生活に對する文化的考察ともなつてゐる。「今日東京市中の散歩は、私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に對する道徳の道に外ならない。之に加ふるに日々昔ながらの名所古蹟を破却して行く時勢の變遷は、市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる。およそ近世の文學に現れた荒廢の詩情を味はうとしたら、埃及・伊太利に赴かずとも、現在の東京を歩むほど無様に、傷ましい思ひをさせる處はあるまい」と書いてゐるやうに、この作は無縁存新文明に亡ぼされた江戸文化へのエレヂイとなつてゐる。而して彼が抒情的描寫に依つて現前する大正初頭の東京風物も、大震災に依つて變滅された今日、この作は二重の價値に於て愛惜せらるべきものとなつた。(木本)

【廣城】故實家【姓名】大野氏。通稱權之丞【號】忍風屋。【現年】天保十二年(一八一〇)九月十一日。享年未詳。【關西】幕府に仕へて小十となつたが、「青表紙」二巻原稿を著し、當代幕府の法令・規程を公刊した罪に依つて丹波國船部郡に幽閉され、そこで歿した。【著書】青表紙(前後二帖)○殿屋藏(前後二帖)○類例結集(三冊)(文化・文藝・文壇の歴史・論議)○遊人・遊記、その他諸書に對し

て編むたる書類を類例に依つて集めたもの。○的例問答七冊(京師風俗・文化・文壇に關する先例となる例・怪談・前火・談話・道徳等の類に關する先例となるべき書物の集録)○太平年表一冊(天文十一年より天保八年に至る事件を年序を追つて記したものである)○他「東國風俗」「執權古實」「律令大結集」「柳營事略」「説書類聚」「忍風屋藏」「假字便覽」等がある。(石田)

【琵琶歌】小説【作者】大倉裕郎【發表】明治三十八年一月。大阪朝日新聞連載。【解説】軍隊では精銳の上等兵といはれた荒井三郎が、たつた一人の妹の里野を成る小學校教師から歸ると所望され、幾多を兄に持つと言はせたくない許りに、絶縁して歸せしめるが、彼女は別から構はれられ、夫婦仲は離れ、他かれもしないのに離別される。その悩みのために彼女は狂ひ、時も時、兄は日露戦争で光榮召募を受ける。併し狂した里野は、同じく薄命に位いてゐる華族の令嬢の手に引取られる。【解説】この作は中村春海の「無花果」(前掲)と並んで、明治三十年代に續出した懸賞小説中、有数の名作である。この作が世間の人氣を煽つたのは、懸賞富選の結果が發表せられた半年の間その作者が分らず、或は文壇名家の匿名の作であらうと言ひ、或は出征軍人であるに懸した人であらうと言はれたが、それが後編が出版に加はつてゐる出征軍人だといふ事が分かるに至つて、俄かに同情が集まつた。その因をなした。しかしこの作は、たとへば、その事情がなかつたとしても、「不知歸」(前掲)「軍村」(前掲)などと共に、當時の清新な家庭小説として推賞し得る作である。

【附記】この作は明治三十八年三月、大阪朝日座の初演(高村多太郎、小堀一太郎)以来、東西の劇場に屢々上演を見、「不知歸」已が罪、「乳姉妹」(各別演)などと共に、新派に於ける重要な演目の一つとなつた。但し原作が大阪の新報紙上に發表された關係上、東京に於ては大抵ほどには迎へられなかつた。脚本は六幕十三場で、脚色者は島山古瓶間無雙。なほ東京初演は、明治三十八年五月國華座(水野村、島山古瓶)で、大劇場での興行は、同四十三年九月本郷座(高田實、高村多太郎、澤村信三、島山古瓶)で、この時には大阪での書き卸しを短縮改訂された。(木村、久保田)

六年千歳と改めて千歳の初代となり、高弟の音蔵は次期の大立者となつた。即ち彼に初まつた富士田姓は、千歳家と音蔵家とに分れて傳はつたのであるが、明治になつて一旦絶えたのを、甲府生れの上益吉兵衛といふ者が、松永鐵十郎から五代富士田千歳と改名、明治三十二年に吉次と改めて元祖の名を復活した。従つてこの吉次は、元祖とは勿論明治以前の富士田とは、血統にも藝にも全く關係はない。大正八年四月十九日、七十四歳で歿した。その實子鐵三郎が四代富士田音蔵である。(前掲)

○富士田吉次 一子 二代千歳 三子 千歳(千太郎) 四子 千歳(新太郎) 五子 千歳(吉太郎) 六子 千歳(吉五郎) 七子 千歳(吉五郎) 八子 千歳(吉五郎) 九子 千歳(吉五郎) 十子 千歳(吉五郎) 十一子 千歳(吉五郎) 十二子 千歳(吉五郎) 十三子 千歳(吉五郎) 十四子 千歳(吉五郎) 十五子 千歳(吉五郎) 十六子 千歳(吉五郎) 十七子 千歳(吉五郎) 十八子 千歳(吉五郎) 十九子 千歳(吉五郎) 二十子 千歳(吉五郎) 二十一子 千歳(吉五郎) 二十二子 千歳(吉五郎) 二十三子 千歳(吉五郎) 二十四子 千歳(吉五郎) 二十五子 千歳(吉五郎) 二十六子 千歳(吉五郎) 二十七子 千歳(吉五郎) 二十八子 千歳(吉五郎) 二十九子 千歳(吉五郎) 三十子 千歳(吉五郎) 三十一子 千歳(吉五郎) 三十二子 千歳(吉五郎) 三十三子 千歳(吉五郎) 三十四子 千歳(吉五郎) 三十五子 千歳(吉五郎) 三十六子 千歳(吉五郎) 三十七子 千歳(吉五郎) 三十八子 千歳(吉五郎) 三十九子 千歳(吉五郎) 四十子 千歳(吉五郎) 四十一子 千歳(吉五郎) 四十二子 千歳(吉五郎) 四十三子 千歳(吉五郎) 四十四子 千歳(吉五郎) 四十五子 千歳(吉五郎) 四十六子 千歳(吉五郎) 四十七子 千歳(吉五郎) 四十八子 千歳(吉五郎) 四十九子 千歳(吉五郎) 五十子 千歳(吉五郎) 五十一子 千歳(吉五郎) 五十二子 千歳(吉五郎) 五十三子 千歳(吉五郎) 五十四子 千歳(吉五郎) 五十五子 千歳(吉五郎) 五十六子 千歳(吉五郎) 五十七子 千歳(吉五郎) 五十八子 千歳(吉五郎) 五十九子 千歳(吉五郎) 六十子 千歳(吉五郎) 六十一子 千歳(吉五郎) 六十二子 千歳(吉五郎) 六十三子 千歳(吉五郎) 六十四子 千歳(吉五郎) 六十五子 千歳(吉五郎) 六十六子 千歳(吉五郎) 六十七子 千歳(吉五郎) 六十八子 千歳(吉五郎) 六十九子 千歳(吉五郎) 七十子 千歳(吉五郎) 七十一子 千歳(吉五郎) 七十二子 千歳(吉五郎) 七十三子 千歳(吉五郎) 七十四子 千歳(吉五郎) 七十五子 千歳(吉五郎) 七十六子 千歳(吉五郎) 七十七子 千歳(吉五郎) 七十八子 千歳(吉五郎) 七十九子 千歳(吉五郎) 八十子 千歳(吉五郎) 八十一子 千歳(吉五郎) 八十二子 千歳(吉五郎) 八十三子 千歳(吉五郎) 八十四子 千歳(吉五郎) 八十五子 千歳(吉五郎) 八十六子 千歳(吉五郎) 八十七子 千歳(吉五郎) 八十八子 千歳(吉五郎) 八十九子 千歳(吉五郎) 九十子 千歳(吉五郎) 九十一子 千歳(吉五郎) 九十二子 千歳(吉五郎) 九十三子 千歳(吉五郎) 九十四子 千歳(吉五郎) 九十五子 千歳(吉五郎) 九十六子 千歳(吉五郎) 九十七子 千歳(吉五郎) 九十八子 千歳(吉五郎) 九十九子 千歳(吉五郎) 百子 千歳(吉五郎)

○五子千歳(於本編十巻、後吉次(後千歳)一四代音蔵) 一子 千歳(吉太郎) 二子 千歳(吉五郎) 三子 千歳(吉五郎) 四子 千歳(吉五郎) 五子 千歳(吉五郎) 六子 千歳(吉五郎) 七子 千歳(吉五郎) 八子 千歳(吉五郎) 九子 千歳(吉五郎) 十子 千歳(吉五郎) 十一子 千歳(吉五郎) 十二子 千歳(吉五郎) 十三子 千歳(吉五郎) 十四子 千歳(吉五郎) 十五子 千歳(吉五郎) 十六子 千歳(吉五郎) 十七子 千歳(吉五郎) 十八子 千歳(吉五郎) 十九子 千歳(吉五郎) 二十子 千歳(吉五郎) 二十一子 千歳(吉五郎) 二十二子 千歳(吉五郎) 二十三子 千歳(吉五郎) 二十四子 千歳(吉五郎) 二十五子 千歳(吉五郎) 二十六子 千歳(吉五郎) 二十七子 千歳(吉五郎) 二十八子 千歳(吉五郎) 二十九子 千歳(吉五郎) 三十子 千歳(吉五郎) 三十一子 千歳(吉五郎) 三十二子 千歳(吉五郎) 三十三子 千歳(吉五郎) 三十四子 千歳(吉五郎) 三十五子 千歳(吉五郎) 三十六子 千歳(吉五郎) 三十七子 千歳(吉五郎) 三十八子 千歳(吉五郎) 三十九子 千歳(吉五郎) 四十子 千歳(吉五郎) 四十一子 千歳(吉五郎) 四十二子 千歳(吉五郎) 四十三子 千歳(吉五郎) 四十四子 千歳(吉五郎) 四十五子 千歳(吉五郎) 四十六子 千歳(吉五郎) 四十七子 千歳(吉五郎) 四十八子 千歳(吉五郎) 四十九子 千歳(吉五郎) 五十子 千歳(吉五郎) 五十一子 千歳(吉五郎) 五十二子 千歳(吉五郎) 五十三子 千歳(吉五郎) 五十四子 千歳(吉五郎) 五十五子 千歳(吉五郎) 五十六子 千歳(吉五郎) 五十七子 千歳(吉五郎) 五十八子 千歳(吉五郎) 五十九子 千歳(吉五郎) 六十子 千歳(吉五郎) 六十一子 千歳(吉五郎) 六十二子 千歳(吉五郎) 六十三子 千歳(吉五郎) 六十四子 千歳(吉五郎) 六十五子 千歳(吉五郎) 六十六子 千歳(吉五郎) 六十七子 千歳(吉五郎) 六十八子 千歳(吉五郎) 六十九子 千歳(吉五郎) 七十子 千歳(吉五郎) 七十一子 千歳(吉五郎) 七十二子 千歳(吉五郎) 七十三子 千歳(吉五郎) 七十四子 千歳(吉五郎) 七十五子 千歳(吉五郎) 七十六子 千歳(吉五郎) 七十七子 千歳(吉五郎) 七十八子 千歳(吉五郎) 七十九子 千歳(吉五郎) 八十子 千歳(吉五郎) 八十一子 千歳(吉五郎) 八十二子 千歳(吉五郎) 八十三子 千歳(吉五郎) 八十四子 千歳(吉五郎) 八十五子 千歳(吉五郎) 八十六子 千歳(吉五郎) 八十七子 千歳(吉五郎) 八十八子 千歳(吉五郎) 八十九子 千歳(吉五郎) 九十子 千歳(吉五郎) 九十一子 千歳(吉五郎) 九十二子 千歳(吉五郎) 九十三子 千歳(吉五郎) 九十四子 千歳(吉五郎) 九十五子 千歳(吉五郎) 九十六子 千歳(吉五郎) 九十七子 千歳(吉五郎) 九十八子 千歳(吉五郎) 九十九子 千歳(吉五郎) 百子 千歳(吉五郎)

【文藝革新會】ぶんげいしんかい 文藝團體【解説】明治四十二年三月、當時に於ける文藝界の革新を目標として結成された會で、會員には林田春潮・登坂竹風・小山朝浦・中島島島・栗原古城・後藤青外・姉崎明風・齋藤野人・佐佐木幸三・津川龍溪・樋口龍溪等が名を列ねてゐた。同年四月「新小説」で、後藤青外が「文藝革新會起る」の題下に會の成立を報じ、宣言を掲げてゐる。五月には神田美土代町の青年會館に第一回講演會を開き、この時には會員の外に、海原元一・三宅雪嶺・井上哲次郎が講演した。第二回は有樂町中央亭に開かれ、その後藤青外が講演した。何時となく自然消滅の形になり、鶴岡蛇尾に終つた。この會の主張は、「吾人の文藝は、光明ある新時代の精神を基礎として、人生の爲にせる文藝ならざるべからず」といふのであり、「剛健な

る思想と、清新な趣味との鼓吹にあり」としてゐるのであるが、その言ふところが漠然としてをり、確乎たる文學的主張を有するものでもなく、その會員の人々を見ても、宙外以外は文學的には傍系に屬する人が多く、革新運動としては何等注目すべきものはなかつた。ただこの運動の中心が後藤青外であり、又その主宰として、やはり一つの反自然主義運動であつたことに興味がある。宙外は既に當時の文壇に於ける主潮であつた自然主義に對して、常に痛烈なる攻撃の筆勢を向けてをり、「非自然主義論」の著すらある。事實は、島村抱月・山野海鳴等が、その主張に對して論議を加へてゐる。この會の主張が多少は當時の文壇に於ける時勢を描いてゐたとしても、かゝる根柢の薄弱な革新運動が、終に徒勞に終るに至つたことは、寧ろ自然の數であつたと云ふことが出来る。(千歳)

一部の讀者層に讀まれてゐた。その後、前田...

【本牧夜話】大正十一年七月、改題「刊...

【櫻痴】(一)セシルのサンマア、ハウス...

つて初子を慰めて去る。初子はセシルとアレ...

の生活を親しく目睹した。この作は當時の所...

て自分が源氏に心を寄せる者と責め立てられ...

橋山で難を逃れた木の洞を箱根に移して祭る...

王・團三郎兄弟を使者として、曾我兄弟は先...

加筆が、この寶水三年三月の上演の際になさ...

た。當時再びアメリカに渡る筈であつたが...

ま

牧逸馬 小説家【本名】長谷川海太郎...

【著者】赤井義知【刊行】享保十四年。巻末門人多田義俊享保十四年の跋に、上坂俊勝がこの書を刊行せんとするので校合を加へた旨が記されてある。【解説】巻首に清少納言の事、二葉の事、香のうすもの事、卯の花の衣の事、二三位の相をしろかし、紫に染る事、六位蔵人青色の事、地色、白、黒、赤、青、黄、紫の事、蒲葉の事、あはひすすひの事、昔、今異なる事、細長、注、からきぬ、うへ、衣、大口はかま、指貫の事、はこへの事、革帯の事、比、結、帯、領中の事、けい、いし、つ、の事等の綱目を掲げ、草紙の文章を抽出し「義按」として、附書を引き考説を施してある。また「枕草紙春曙抄」に附編して刊行されたものもある。

【正式】。佛人【註】池田氏【通稱】十郎右衛門【生没】不詳【創作】初め貞宗門、後貞徳門【関係】著者、大和郡山田城主本多内記政勝の臣である。正保二年重頼が「毛吹草」を出すと、翌年春「古保里山」【毛吹草】を著してこれを離し、同年に貞宗も書いて「米守守」を著して「毛吹草」を離し、この兩書は共同執筆のものであつたらしいが、「清持太平記」(別題)には、重頼が「毛吹草」の編に當つて、正式(庭調)は春のはじめの試筆かなの句を巻頭に置くべき事を約し、春可の聲も歌謡となり今日の春の句を巻頭にしておいたので、正式がこれを借り、「都山」を著して非難したのであると傳へ、なほ重頼が「都山」に對し、怒つて正式に果し状をつけ、正式が誓詞を書いて謝罪したので事なきを得たが、正式が武士でありながら町人の重頼に果し状をつけられて陳狀を著くなどは卑怯の至りか、但しは町人は相手に取つて不足と思つたのか不審だと世上に取沙汰したと傳へてゐるが、云ふ所が受取りにくい所もある。どこまでが事實かは知られない。正式は「毛吹草」に入選しなかつた自讃句二十一句を「都山」に公表してゐるが、もと貞宗の門人で正式とは同門であつた關係になる季吟が、その山の井(別題)中の例句として右の二十一句中の十句を採用してゐるのは、意味ある事と云へる。「佛家奇人談(別題)には、正式が「そはに居て見ぬや芳野のはなの先と疎んだのが、薄候の間に進し、花見て參れとて暇路はり、吉野の花廻りして手頃の枝を折つて歸つて薄候に捧げると、侯は大に悦んで、あし垣の吉野間近く家居して問ふべき花にははるべし」といふ歌を下し賜はつたと傳へてゐるが、その典據を詳し得ない。正式は佛蘭の外狂歌を著し、寛文十一年に堀川百首題によつて自作の狂歌合を試み、右に平野實持、左に布留田造の題名を用ひ、「堀川百首狂歌集」と題したが、後の狂歌流の狂名の流儀がこゝにあると云はれてゐる。正式の息正親も佛に遊び「玉海集(別題)に十五歳にして既に入道して居り、門人には同じ都山の人間村正が、あつて、「大和順徳」寛文十年刊、「續大和順徳(寛文十一年刊)の撰がある。

【参考】玉海集正序○講談大系(用生用明)○佛蘭史の研究(佛蘭史)○源流(志田)○松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

五目東京府下品川町北品川宿三二二に生る。男爵益田孝の嗣子。十六歳英國に渡り、ケムブリッジのリース中に入る。卒業後、更に白耳義に赴き、アントワープ市の商業大學に學んだ。歸朝以來實業界に活躍して諸種の會社事業に關係し、現に臺灣製糖大日本人監肥料・帝國製糖等の重役である。明治三十七年、初めて新設のために劇作の筆を執つて以來盛に作品を上場し、特に喜劇に於てその特色を發揮して一家の風を成す。【作品】「女天下」「暁の旅行」等新設の演目を賑はしたが、帝劇の女優劇には殆ど定例の如く「女優風情」「ドッチャダン」一編の世の中等の新作が續々上演された。「暁」その他西洋種の劇も四々

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

レイの竹俵(註)と元祿若衆と、又ユーゴの「エルナニ」を「戰國英雄」と題して翻案した類ひである。その後、毎夕新聞社に入社して社會部記者をしたが、長くは續かなかつた。處女作を発表してから十年後時事新報に連載した「白魔」が著者として落ちつかせるに至つた。この間に翻譯も數々試み、それから「言泉社」なる出版所も設けたが、これは失敗であつた。同十四年、「週刊朝日」に「日月双紙」を連載したのが「都物」長篇の最初の成功をかち得たもので、爾後彼は現代ものと當時と二道掛けの奇才を發揮してゐる。なほ婦人雜誌には缺くべからざる作家として尊重せられた。近年思想上にフアシの傾向を帯び來り、少壯軍部などと接近して著しく社會の眼を見はらせた。作品は「激進」「日輪」「炎の空」「空しき青春」「暗い情熱」「落花紅光線」「火刑」「漫遊」「清川八郎」等數多く、長篇三人全集(新編註)に大部分が収録せられてゐる。外に、戯曲・隨筆・翻譯も數が多い。

【批評】。他の大衆文學者が、大抵文學の正統的教養を缺いてゐる中であつて、彼のかが廣汎な讀者家で歐洲近代文學にもほぼ通じ、情熱も、技巧も、思想も、批評も持つてゐる點が強味である。現代ものでは「白魔」や「日輪」がめには、どんな事でもしてのけるといふやうな男や、また男を食ひものにして、その血肉をしゃぶり盡して、これを繁麗の如く捨て去つて顧みないといふやうな女を描く。文章は達者で、獨自の工夫に成り、なかに(未だ)ある。

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

【参考】日本戲曲全集現代篇第六編(水木)【参考】松の葉(名義)○歌謡書(牛紙本)五卷【編者】秀松軒【名義】編者の名に因む【序】。また音楽を松風の響によそへた意味もあらう。【刊行】元禄十六年六月。京都の書肆、井筒屋庄兵衛・高木治兵衛發行。【請求】新書類聚從

それを講義し、プロレタリア文学が盛になる
とそれに追いつき、多少時代に迎合した傾きが
あるが、これは時評家にとつて免れ難い通弊
であつたらう。歐洲留學中、批評史の研究を
専攻題目とした爲め、初期の特色たる鑑賞批
評とは全く反対に、批評の客観的基準を換察
しつつあつたが、その研究が大成しないうち
に夭折した。 (木村)

む

息子 戯曲 一幕 作者 小山内薫
【発表】大正十一年七月「三田文学」【刊行】
大正十三年戯曲集「息子」所収。小山内薫全集
第六卷。日本戯曲全集現代第八編所収。【上
演】大正十二年三月帝國劇場に於て初演。役
割は、金次郎(岸上五郎)、捕吏(寺田龍雄)、火
の香の老翁(岸上五郎)。
【梗概】江戸の入口。夜半の雪が盛に降り積
む川の片隅に、粗末な火の香小屋だけが焚火
で煙子を明らしてゐる。大阪の流浪生活か
ら、九年振りで生れ故郷に歸つた金次郎も、お
尋ね者の身の上とて温い寢床を持つことも出
来ず、寒さに追はれて、ふとこの小屋へ立ち
寄つて手を暖めた。頑固な意地の悪さうな火
の香の老翁は、同じ年頃の息子でも思ひ變
へてか、案外親切に煙草をくれたり食ひ残し
の精進を食はせたりする。金次郎も次第に打
解けて口をきいてゐるうち、火の香の息子が
上方へ行つてゐると聞いて、相手が自分の親
父だといふことが分つて来る。息子が律師者
で今にきつと立派に出世して歸つて来ると信

じてゐる火の香は、金次郎がそれとなく名乗
りかけても、てんで取り合はない。そのうち
金次郎は懐仲だつた娘が自分を慕つてまだ嫁
にも行かずにゐることを知り、假りに息子が
途を踏みはづして歸つて来たらどうする、と、
老翁の氣持を聞く。火の香は誇りを傷けられ
た思ひで怒る。そこへ町を見廻る手先がやつ
て来て、金次郎を怪しんで訊問する。そして
お尋ね者と目星がついて捕へようとする。
金次郎は一度逃げたが、また小屋の前へ来た
時、遂に捕へられる。さうして火の側へ引き
置かれて、老翁にも顔を見せようとするので、
急に神妙な態度を捨てて相手を倒して小屋を
躍り出す。手先が見當ちがひの方向に追つて
行くのを見て、小屋のうしろに隠れた金次郎
は、老翁に聲をかける。「ちいさん、あばよ。」
火の香は少し顔を出して、「あばよ。捕者であ
ねえ。」「何かお前んとこの婆さんは捕者か。」
「ばあさんは死んぢまつた。死んだ。息子の
歸るのを待たねえでか。何を言つてるんだ。
早く行け。捕者であるよ。」金次郎は聲を飲む
やうに、「ちやん」と一言云つて闇の裡に姿を
消した。
【批評】愛蘭の作家たる Harold Chopin の
Augustine in search of a father の 劇案
であるが、単純で親しい主題を簡潔で機智あ
る臺詞に依つて展開させた好曲の一幕物であ
る。ことに言葉の陰影まで、すつと江戸の
の世界にこなれてゐる。何等劇作と違ふとい
ふとなつてゐる。菊五郎は歌次の上演で常に
成功を取め、築地小劇場も作者自身の演出で
大正十五年十二月これを上演した。その他魯
樂劇場、試演劇場を問はず、場になること屢々

で、上演回数に於て作者の作品中正に第一位
にゐる。 (木村)
【参考】「息子」の由来(小山内薫全集第六卷)
無名作家の日記 小説【作
者】菊池寛【発表】大正七年七月「中央公
論」【刊行】大正七年十一月新進作家叢書に
収めて刊行。短篇集「心の王国」の外、菊池寛
全集、改造文庫等に収載。
【梗概】富井は東京の高等學校を卒業すると、同
じ創作家志望の仲間と離れて一人京都の大學
に入った。それは、經濟上の理由もあつた
が、更に優れた才能を持つ山野や桑田等に伍
して、絶えず不快な壓迫を受けるのが堪らな
いからだつた。富井は自分の作家的天分に就
いて漸く不安を感じ出してゐるのだつた。し
かし彼等を忘れて研究に没頭しようとしても
烈しい焦燥を抑へることが出来ず、遂に對抗
するために戯曲を書いて、その知遇を期待し
ながら中田博士に宛てた。教室にはノー
ト作りの郵便すべき奴等ばかりだつたが、投
書袋で鳴らした吉野や黙々として長篇を書い
てゐる佐竹だけが、僅に彼の知己であり同志
であつた。東京の仲間が自分を除外して同人
雑誌を出すといふ山野からの告知は、彼に取
り残された孤獨と侮辱を同時に感ぜしめ、
しかもいよいよその雜誌を手にし、山野や桑
田の作品を讀み、その雑誌の價値を認める
に及んで、烈しい反感と嫉妬とを禁じ得な
かつた。そして吉野の罵倒などに拘はらず、山
野は批評家の賞讃を浴びながら第二作を發表
し、やがて超中央の大雑誌に花形として迎
へられたではないか。もう自分は彼と競争に
もならない敗北者になつたかと思ふと、無念
と絶望の涙が頬を濡らすのだつた。そこへ久

村瀬源三郎

この作の背景として設立つてゐるのも別個の
興味を惹く。 (木村)
【初編】明治二十二年九月、静岡縣岡部郡飯田
村に生る。静岡中學校、慶應義塾の文科に
一年ほど在り、永井荷風(別題)の影響を多分に
受けた。「希望」と云ふ雑誌を出したが、永く
は續かず、東京婦女新聞社を経て、日本電報
通信社に入つて約二ヶ年勤務し、新聞編輯に
あつた。大正四年「琴姫物語」なる説話一篇
を、中央公論に發表され、更に淺草双紙「馬
鹿獅子」二人大名などを續々發表した。就
中「本朝美人傳」は最も名譽を得たものであ
る。彼は五ヶ年間「中央公論」以外の雑誌へは
一切執筆しなかつたが、その後獨力を以て雜
誌「旅人」を刊行、よく四年餘の長きを維持し
た。長篇「清水次郎長」は同誌に連載したもの
である。「被衣繪巻」は「ふらんす物語」など、著
書三十冊を超えてゐる。
【批評】一時の「中央公論」は小説でなくて面
白い讀物をその説話欄に收録した。これは論
説欄と創作欄の間に介在して編纂される慣例
であつたので、「中間讀物」とも呼ばれた。
ジャーナリズムの上来たのを勢力あらしめ、
その努力を續けて来たのは、彼と中實太郎
(別題)との功績が最も著しい。それから「正傳

村松梢風

【参考】「創代集」(菊池寛の譯)「江戸芝居年代
記」(木村の譯)「新刊全集」(菊池寛の譯)
【参考】「創代集」(菊池寛の譯)「江戸芝居年代
記」(木村の譯)「新刊全集」(菊池寛の譯)
【参考】「創代集」(菊池寛の譯)「江戸芝居年代
記」(木村の譯)「新刊全集」(菊池寛の譯)

め

清水次郎長」の創作振りをみると、次郎長の最
初の正傳なる愚庵和尚の「東海遊俠傳」を骨子
とし、それに作者が次郎長と同名なる所から、
次郎長の譚子や當時の遺老の思出話を丹念に
聞き取り、讀んで傳へられた粉飾を削落して
實話に基づき、時に賭博などの考證も交へると
云ふ進め方で、巧みとしてアンドレ・レウロア
などの試みてゐる「グロテスク・ロマンス」
と同じ意圖のものを作り上げてゐる。「人間儀
儀」は社會同題に接近して「ふらんす物語」に
も經濟的のめきをきかせてゐるが、どうも腰の
おちつかぬ點と、説話作家の出るが故に描
寫の不足があつたが、近時、全く大衆小説
の創作が本格に入つて来て、こゝのある老巧
さを示すやうになつた。 (木村)

目黒巻談

し振りでまた山野から手紙が来て、水準以上
のものなら飲んで紹介したいからと書稿を促
して来た。富井は昂奮し、感激してその好意
に應じ、まだ一枚も讀んでゐない中田博士か
ら自分の書いた戯曲を取り戻して送つた。と
ころが同人の一致した意見だとして、非難の
評語と共に掲載を見合せるといふ知らせだつ
た。それは嘲弄の度でなくて何だらう、富井
の山野に対する憎悪は十倍した。その同人雜
誌が山野や桑田等を文壇に送つてから既に二
年餘になつた。流行作家の彼等と無名作家の
富井との距離は、もう絶對的に廣がつて了つ
た。彼はそれも運の仕業と諦め、學校を出た
ら田舎教師でもして平和な生活に安住の地を
求めようとしてゐる。流行作家なら空虚な
名ではないか。人間が死滅して蚯蚓が生き延
びれば、天才の作品だつて蚯蚓に喰はれるだ
らう。まして山野なんかの作品は今十年もす
れば、蚯蚓にだつて喰はれなくなるんだ。
【批評】この二ヶ月後の「忠直轉行狀記」(別題)
をこそ眞の出世作と呼ぶべきであるが、當時
の繪畫臺とした中央公論に發表して、彼の特
色を一般に知らしめた最初の作品である。所
謂天分の誤算をした作家志望の一青年が華や
かな文壇への登場を熱望しながら友人の見事
な成功を餘所に、遂に無名作家として永久に
葬られて行く運命を、自叙の日記體に描いた
ものである。盲目的な自信を失つて以来の焦
慮・嫉妬・反抗・呪詛・ひがみ、やがて無力な敗
北者として皮肉な諦めに入る経験が、端的簡
勁の筆致を以て餘す所なく描寫され、作
者が倦れた人間心理の洞察者たる實を示して
ゐる。なほ新思潮派雑誌の當初、作者のみが
京都に在住した事實が、境遇は異なりといへ、

校は仙臺市及び東京牛込の愛日小学校の二つで終へた。仙臺の私立第一中を出た頃から俳句に凝り、盛岡の杜陵吟社の例會に出席するたため、わざ／＼仙臺から汽車で出掛ける程の熱心さであった。子規に最も心酔し、その感化を受けた事が多い。後、早稲田大學に入つたが、中途で日露戦争が起り、父が出征したので、已むなく退學し、それから早稲田の講義録で勉強した。福本日南に知られて九州日報の編輯局に入つたのが二十五歳の八月である。そこに四五年あつたから早稲田の依願によつて廣島の藝文日新聞に入り、前後九年間勤めた。それから東京へ歸り、報知新聞に入つて今日に至り、途中一度外遊をしたことがある。作品は頗る多く、中でも『澤村田之助』及び長篇の考證的讀み物たる『江戸から東京へ』は最も名高い。『太閤記』は、運慶十二年の間揚敷して今日に至つてゐるが、執筆の長期に亘つてゐる事に於ては稀有と云つてよい。俳誌『千鳥』を主宰してゐる。

『作風』代表作『太閤記』に於て「英雄を偶像視することに、又凡人と平等視することに反對だ」と云つてゐる通り、在來の講義などの類型的英雄主義にも反對し、又新作家の新鮮なるものにも反對して中道を歩いてゐる。どこかにとぼけたやうな飄忽な趣があり、又叙述にも淡々たる寫生文の匂ひの存するところ、俳句の散漫を掩ひ難い。〔木村〕

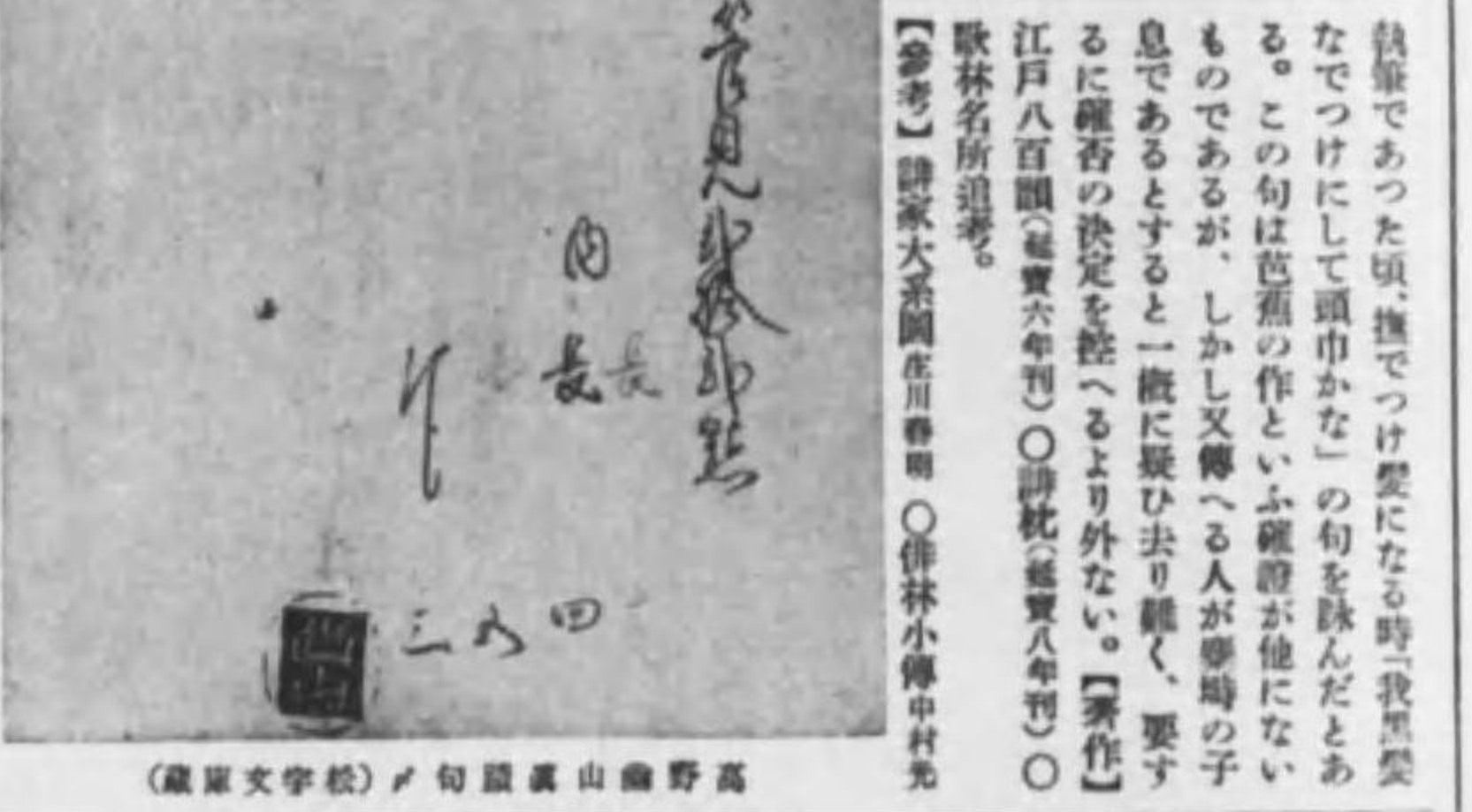
山川菊葉 評論家〔開歴〕明治二十三年十一月東京に生れた。東京府立第二高等女學校を経て女子文學堂を卒業。社會批評家山川均に縁を授けて雑誌、社會主義研究』を編輯し、又同誌上に執筆した。爾來社會主義運動、婦人運動に引きつづき携はつてゐる。特にマルクス主義の原則からブルジョアの婦人運動に轉向させる上に、女史の力は興つて功績があつた。長く雑誌編輯、公論の社會時評に執筆してゐる。頭腦の明晰と論議の痛烈において、婦人批評界の異色である。『著書』戀愛の理想地○婦人の勝利○現代生活と婦人○女の立場から○社會主義と婦人運動○婦人論(エッセイ)○女性五十講。その他多くの著書がある。〔平林〕

山下金作 俳傑(初代)〔通徳〕文五郎(別名)山下又四郎(二代)〔俳名〕里紅、後、李紅。(生歿)寛延三年(一七六〇)七月二日に歿す。享年未詳。〔法名〕一乘院宗和日親(開歴)山下又四郎の門下で、後、その養子となる。寶永七年若女方として大阪の舞臺を踏み初め、正徳二年、油屋お染の久松の若衆方で好評を博してから果敢と、享保八年冬江戸中村座に下り、女御歌書』の經世女房津波津役が大當りを取り、上上吉の位に進められた。江戸に滞留すること六年、この間、數回、お通、お菊水等に名を高め、同十四年冬歸阪して元文元年冬京高へ上つたが、翌二年冬大阪へ歸り、養父の名を襲つて共に立役となつた。然るに同四年冬女方に復すと同時に金作の名に歸り、寶元元年功上吉に昇せられたが、寛延元年冬終に病氣のため舞臺を退いた。美談で、佐野川萬壽、瀧川菊之丞と共に享保後年期に於ける三名手の一人であり、時代と世話を兼ね、演事を最も得意とし、所作事も細くした。〔木村〕

幽山 俳人(姓名)高野直重。通稱孫兵衛(別號)丁々軒(生歿)不詳(俳傳)重頼門(開歴)もと京都の人で、後、江戸に移つて本町河原に住した。江戸に移つたのは寛文の末頃らしいが、長く旅行を續けてゐたので、その初めは高屋といふ如きものであつたらしい。後、伊勢久居城主で俳人でもあつた藤堂任口に仕へて竹内爲人と改めたといふのであるが、『評伝』(開歴)寛八年刊に「久居に始て召れし時」といふ前書を持つ「千世や此久居花さへそのも菊」の句があるから、その後間もなく仕へたのかも知れぬ。頗る風流な

好事家で、和歌、俳諧いづれをも善くし、寛文二三年の頃から日本全土の大旅行を始め、西は棒の浦(熊野)から東は津輕の果まで、その足跡全土踏と到らざるところなく、且つそれが察せられる。かくて寛文九年東北旅行の折には、名所を記す外に各地の名高き物とも、即ち武隈、阿蘇、栗木、松山の松が枝、宮城野の萩、十符の菅、名取川の埋木、結繩の橋の橋片、實方の塚の薄の八種を持ち歸つて、それ等を詠んだ知友の俳句を初め詩歌等を乞ひ集めたのである。俳壇上では重頼門の貞門俳人であるが、時代及び重頼の傾向にもよつてであらう、貞門の隨處に於いて談林風に變化した一人であつた。延寶六年に來雲、雲水、一機等と興行した八十八首の「江戸八百韻」は全く談林調で、この中の幽山の句「花をふんで鋪纏うらめし暮の鐘」の句は、幽山の句中最も聞えてゐるものである。又「評伝」の調も大體同様である。なほ芭蕉が幽山の執筆(別題)を勧めたといふ傳へがある。それは「俳諧傳説」所載の軸箱裏書(芭蕉が高山樗牛に送つた書簡の附の幽山の子息の記文)に、芭蕉が江戸へ出て幽山の

執筆であつた頃、撫でつけ愛になる時、我思案なでつけにして頭巾かな」の句を詠んだといふものがあるが、しかし又傳へる人が夢時の子息であるとするとい概に疑ひ去り難く、要するに確否の決定を控へるより外ない。〔著作〕江戸八百韻(寛六年刊)○詩林(寛八年刊)○歌林名所追考。〔参考〕講談大系園在川春明○俳林小傳中村光



(藏東文字校) 句 詞 韻 山 幽 野 高

久○俳諧人物便覽三編著者○俳諧傳説石 友李風 小説家、劇作家〔本名〕直次郎(開歴)明治十年三月二日尾道市に生る。學歴なし。大阪新報社會部長から松竹閣本部に轉じ、新聞劇の専断作者となり、澤田正二郎の當り處たる「國定忠治」一形態半本を執筆上演した。大家小説の作も多く、「修羅八重」三獄門首土藏「化鳥地獄」等が名高い。

横光利一 〔政方〕を見よ。小説家(開歴)明治三十一年三月十七日、福島縣東山温泉に生れた。本籍地は大分縣であつたが、父は測量技師で、當時同地方にゐたからである。その後父の任地が轉々したので、小學校は十回以上も轉校した。中學校は祖母の生地伊賀の上野中學校を卒業した。次いで早稲田大學英文科に入學し、後、政治経済科に轉じたが、半ヶ年にして父の死に逢つて退學した(二十五歳)。夙に「文章世界」などに投稿してゐたが、後藤彦三等と同人雜誌「西」を發行したこともあつた。大正十二年一月「文章春秋」同人となり、その關係で第六次「新思潮」同人等と知り合つた。その年五月「新小説」に長篇小説「日輪」を發表して、新進作家としての地位を確立した。同十三年十月「新思潮」の同人となり、新進作家(別題)の文學運動を起した。また昭和二年四月「文藝時代」の同人となり、雜誌「手帖」を創刊した。比較的長い間新進作家に執筆してゐたが、その頃から幾分アリウスチックに傾き、同時に形式主義に傾いて行つた。〔著作〕横光利一集(著者集小全集)○

十一年毎夕新聞社に入社、家庭部を擔任して...

【批評】筋が類型的小説といふ點を除けば、この作家は...

【芳川春彦】初名高三郎、諱は俊雄。後俊雄を通稱とした。【生没】弘化元年十二月十七日、武蔵...

【吉屋信子】のち小説家【開歴】明治二十九年一月十二日新潟縣官舎に生れた。父が官吏であつたため、併はれて新潟市、佐渡新...

在である。彼女自身が「若い女達」の作家オオロコワを理想とする通つてゐるやうに...

行會本には、小宰相といふ見出しのあるべき所に、それが脱してゐるのは印刷の粗雑であ...

【批評】「価値」種書は「真原書目録」に、本書について西鶴が一代男二代男の作振りにな...

【米川正夫】のち小説家【開歴】明治二十四年十一月二十五日、岡山縣高梁町に生る。高梁中學校を経て東京外國語學校語料...

【李花集】のち私歌集二卷【作者】宗良親王【成立】宗良親王は後醍醐天皇の第八皇子であらせられ、南朝のために轉戦され、弘和元年十二月以後、元中六年正月以前、即ち七十...

俊つて、平明な中に眞實のあふれた御作となつてゐる。「新葉集」に於ても代表的な歌人として約百首が歌められてゐるのであつて、この點からも親王の御家集「李花集」の和歌史的意義は大いである。

【参考】校註国歌大系解題〇南北朝時代文學新史 藤野野矢

理想美 〇 Das Idealische

【解説】この語は一定して用ひられてゐない。例へば「崇徳天皇御遺言」を理想美とする如く、主として何等かの體系の標準から理想として選ばれた美的理想の一を指す場合に用ひられる。特殊な場合としての「ホルケルトの用語に就いては「美的理想」を見よ。〔風通〕

輪廻 〇 小説【作者】森田草平【發表】大正十二年九月號以降の「女性」に連載。【刊行】大正十五年一月新潮社刊。後、明治大正文學全集第二十九卷所收。

【解説】一高一部三年生の岡崎池也は、校内圖書部で卒倒した。十年前、人に忌まれる病氣を患つて父が死んだ後、母子二人の郷里の暗い生活を繰つて、中學時代から東京で暮してゐたが、思春期に達するまでは他の青年達と同様に純眞な感情を失ふことなく過ごして来た。しかし異性の誘引を感じる毎に呪ふべき肉體の遺傳を思つては、悲愴な絶望に落ちざるを得なかつた。天刑病者の血を享けた者と知つて逃げ出さぬ者があるとすれば、それは徳と水功離れられない因縁を結んだ女ばかりの筈だ。そんな愛人を眞實に求め得ないことを思ひ、荷はされた恐しい運命の重壓に池也は心身を害ねざるを得なかつた。歸郷した池也は、常におど／＼してゐる母の傍で、誰でも自分の秘密を知つてゐる田舎の村に休

安の境を見出さうと、番太の頼で三十も過ぎた水蓮の結婚お祭を妻にしようとした。しかしそこに若い美しい女性、従妹の小夜子が現れた。母は葉病の父に侍して實家へ歸らなかつたので、岡崎の家とは表面離絶した關係にあつたが、池也と小夜子との戀愛はその歪められた事情の下に反つて熱烈さを加へて行つた。すべてを知つてゐる小夜子は同情と憧憬と美しい感傷とで、苦痛と絶望に喘ぐ池也を救つてくれる相手だつた。息づまる逢引を重ねた末に事露はれたので、二人はお祭の手引で近くの村に匿れ、戀を全うしようとした。しかし遂に小夜子との結婚は許されなかつた。池也は失戀の絶望よりも、改めてさきの備前と苦悶を再びする苦痛に堪へなかつたが、その時母は「お前さんは本當はお父さんの子ぢやないぞ」と事實を告げた。池也の世界は顛倒した。そして母の不倫に依る他人の子と知りながら、自分を熱愛してくれた父に對し、新たに精神的な親の情を感じながら、別の肉體的な親に依つて愛撫すべき遺傳を享けなかつたことを知つて、非常に救はれた氣持になつた。かくて池也は更生の意氣に蘇り、新しい人生を目ざして上京の汽車に搭乗するのであつた。

【批評】作者が敢て「故夏目漱石先生の筆前に捧ぐ」と註してゐる位に、作者の最も自信ある力作である。筋からいへば「煤煙」(別題)前篇を成すとも見るべく、彼の隅江がこの小夜子の異色とすべきは、所謂戀愛小説に終ることなく、親子の關係を取扱つてそこに力點を置いてゐる一事で、子としての池也の思想感情の動搖影響がよく寫し出されてゐる。むしろ

軌跡とも云ふべき筆致を以て、悠々この長篇を買いてゐるところ、作者の地力を感ぜさせ、岐阜近郊の地方色を巧みに描いてゐることも、この作に於ける大きな收穫とすべきである。〔水木〕

れ

歴代和歌勅撰考 〇 吉田合世【成立】天保十五年の自序によれば、當時より十三四年前、江戸より水戸に下つた頃、何くれと書き集めて置いたものを、弘道館の助教となつて歌學局の事を掌るに及び、評書して近侍の人々の參考に資したものと云ふ。【諸本】存本、歌學大系第四卷所收。【解説】卷一より卷五までは「萬葉集」及び「古今集」以下の勅撰二十一代集について解題を記したものであつて、各集別にその時代、撰者、巻数、部立、その他撰集の次第、傳本、論評、雜考等に関する。また卷六は和歌勅撰以下勅撰感知發達に至る十一項を立てて和歌史の主要事項に關して考證したものであるが、古より近世に至るまでの諸説を涉獵網羅し、諸所自注をも記してゐる。「萬葉集」及び勅撰集を包含する撰集故實の總括的解説書としては、最も詳密にして而も甚だ要領を得た書であつて、後學の徒を裨益するところ大である。〔中邑〕

終遺補

日本文學大辭典索引

- 一、總索引
- 二、難訓索引
- 三、假名索引
- 四、歐文索引

伊賀越前補合判龍	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
----------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

易心後語	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

Table with multiple columns containing entries for 'ウシ' (Ox) and 'ウチ' (Home/Inn). Each entry includes a title, a classification code (e.g., I, II, III), and a page number.

Table with multiple columns containing entries for 'ウツ' (Forest), 'ウチ' (Home/Inn), 'ウマ' (Horse), 'ウメ' (Plum), 'ウミ' (Sea), 'ウヤ' (Wife), 'ウモ' (Wife), and 'ウラ' (Underneath). Each entry includes a title, a classification code, and a page number.

Table of contents for 'ウリーエイ' (Uriei) section, listing titles, authors, and page numbers across multiple columns.

Table of contents for 'エウーエノ' (Eueno) section, listing titles, authors, and page numbers across multiple columns.

Table with multiple columns listing titles (e.g., 御本一抱, 御本起泉), volume numbers, and page numbers. Includes sub-sections like オキ, オク, オサ, オシ, オス, オセ, オソ, オチ, オテ, オト, オナ.

Table with multiple columns listing titles (e.g., 御六三, 御染の七夜), volume numbers, and page numbers. Includes sub-sections like オチ, オク, オサ, オシ, オス, オセ, オソ, オチ, オテ, オト, オナ.

Table of contents for the right page, listing authors (e.g., オノ, オハ, オマ, オム, オメ, オヤ, オラ, オレ, オワ) and their respective works with volume and page numbers.

オン

Table of contents for the left page, listing authors (e.g., オノ, オハ, オマ, オム, オメ, オヤ, オラ, オレ, オワ) and their respective works with volume and page numbers.

Table of contents for the 'カ' section on the right page, listing titles and page numbers.

Table of contents for the 'カ' section on the left page, listing titles and page numbers.

復讐録香山物語	II	三七	1	片	片想	II	三七	1	月令物語
復讐録手紙	II	二二	2	片	かたこと(方言書)	II	二二	2	活歴
復讐録魚名	II	三三	3	片	かたこと(方言書)	II	三三	3	カチ
復讐録高田馬場	II	四四	4	片	かたこと(方言書)	II	四四	4	カチ
復讐録梅之辻	II	五五	5	片	かたこと(方言書)	II	五五	5	カチ
復讐録見聞	II	六六	6	片	かたこと(方言書)	II	六六	6	カチ
復讐録本俣夫婦	II	七七	7	片	かたこと(方言書)	II	七七	7	カチ
復讐録牛紅	II	八八	8	片	かたこと(方言書)	II	八八	8	カチ
復讐録手引糸	II	九九	9	片	かたこと(方言書)	II	九九	9	カチ
復讐録天下茶屋	II	〇〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	〇〇	〇	カチ
復讐録末末太鼓	II	一一	一	片	かたこと(方言書)	II	一一	一	カチ
復讐録女實話	II	一二	二	片	かたこと(方言書)	II	一二	二	カチ
復讐録女鉢木	II	一三	三	片	かたこと(方言書)	II	一三	三	カチ
復讐録鳥兵衛獅子	II	一四	四	片	かたこと(方言書)	II	一四	四	カチ
復讐録山新聞	II	一五	五	片	かたこと(方言書)	II	一五	五	カチ
復讐録新橋	II	一六	六	片	かたこと(方言書)	II	一六	六	カチ
復讐録女実	II	一七	七	片	かたこと(方言書)	II	一七	七	カチ
復讐録自來水也説話	II	一八	八	片	かたこと(方言書)	II	一八	八	カチ
復讐録狂言	II	一九	九	片	かたこと(方言書)	II	一九	九	カチ
復讐録五郎鯛魚	II	二〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	二〇	〇	カチ
復讐録手引	II	二一	一	片	かたこと(方言書)	II	二一	一	カチ
復讐録高砂	II	二二	二	片	かたこと(方言書)	II	二二	二	カチ
復讐録三味線由来	II	二三	三	片	かたこと(方言書)	II	二三	三	カチ
復讐録三味線由来	II	二四	四	片	かたこと(方言書)	II	二四	四	カチ
復讐録三味線由来	II	二五	五	片	かたこと(方言書)	II	二五	五	カチ
復讐録三味線由来	II	二六	六	片	かたこと(方言書)	II	二六	六	カチ
復讐録三味線由来	II	二七	七	片	かたこと(方言書)	II	二七	七	カチ
復讐録三味線由来	II	二八	八	片	かたこと(方言書)	II	二八	八	カチ
復讐録三味線由来	II	二九	九	片	かたこと(方言書)	II	二九	九	カチ
復讐録三味線由来	II	三〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	三〇	〇	カチ
復讐録三味線由来	II	三一	一	片	かたこと(方言書)	II	三一	一	カチ
復讐録三味線由来	II	三二	二	片	かたこと(方言書)	II	三二	二	カチ
復讐録三味線由来	II	三三	三	片	かたこと(方言書)	II	三三	三	カチ
復讐録三味線由来	II	三四	四	片	かたこと(方言書)	II	三四	四	カチ
復讐録三味線由来	II	三五	五	片	かたこと(方言書)	II	三五	五	カチ
復讐録三味線由来	II	三六	六	片	かたこと(方言書)	II	三六	六	カチ
復讐録三味線由来	II	三七	七	片	かたこと(方言書)	II	三七	七	カチ
復讐録三味線由来	II	三八	八	片	かたこと(方言書)	II	三八	八	カチ
復讐録三味線由来	II	三九	九	片	かたこと(方言書)	II	三九	九	カチ
復讐録三味線由来	II	四〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	四〇	〇	カチ

カッポレ	II	三七	1	片	片想	II	三七	1	加藤英樹
加藤英樹	II	二二	2	片	かたこと(方言書)	II	二二	2	加藤英樹
加藤英樹	II	三三	3	片	かたこと(方言書)	II	三三	3	加藤英樹
加藤英樹	II	四四	4	片	かたこと(方言書)	II	四四	4	加藤英樹
加藤英樹	II	五五	5	片	かたこと(方言書)	II	五五	5	加藤英樹
加藤英樹	II	六六	6	片	かたこと(方言書)	II	六六	6	加藤英樹
加藤英樹	II	七七	7	片	かたこと(方言書)	II	七七	7	加藤英樹
加藤英樹	II	八八	8	片	かたこと(方言書)	II	八八	8	加藤英樹
加藤英樹	II	九九	9	片	かたこと(方言書)	II	九九	9	加藤英樹
加藤英樹	II	〇〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	〇〇	〇	加藤英樹
加藤英樹	II	一一	一	片	かたこと(方言書)	II	一一	一	加藤英樹
加藤英樹	II	一二	二	片	かたこと(方言書)	II	一二	二	加藤英樹
加藤英樹	II	一三	三	片	かたこと(方言書)	II	一三	三	加藤英樹
加藤英樹	II	一四	四	片	かたこと(方言書)	II	一四	四	加藤英樹
加藤英樹	II	一五	五	片	かたこと(方言書)	II	一五	五	加藤英樹
加藤英樹	II	一六	六	片	かたこと(方言書)	II	一六	六	加藤英樹
加藤英樹	II	一七	七	片	かたこと(方言書)	II	一七	七	加藤英樹
加藤英樹	II	一八	八	片	かたこと(方言書)	II	一八	八	加藤英樹
加藤英樹	II	一九	九	片	かたこと(方言書)	II	一九	九	加藤英樹
加藤英樹	II	二〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	二〇	〇	加藤英樹
加藤英樹	II	二一	一	片	かたこと(方言書)	II	二一	一	加藤英樹
加藤英樹	II	二二	二	片	かたこと(方言書)	II	二二	二	加藤英樹
加藤英樹	II	二三	三	片	かたこと(方言書)	II	二三	三	加藤英樹
加藤英樹	II	二四	四	片	かたこと(方言書)	II	二四	四	加藤英樹
加藤英樹	II	二五	五	片	かたこと(方言書)	II	二五	五	加藤英樹
加藤英樹	II	二六	六	片	かたこと(方言書)	II	二六	六	加藤英樹
加藤英樹	II	二七	七	片	かたこと(方言書)	II	二七	七	加藤英樹
加藤英樹	II	二八	八	片	かたこと(方言書)	II	二八	八	加藤英樹
加藤英樹	II	二九	九	片	かたこと(方言書)	II	二九	九	加藤英樹
加藤英樹	II	三〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	三〇	〇	加藤英樹
加藤英樹	II	三一	一	片	かたこと(方言書)	II	三一	一	加藤英樹
加藤英樹	II	三二	二	片	かたこと(方言書)	II	三二	二	加藤英樹
加藤英樹	II	三三	三	片	かたこと(方言書)	II	三三	三	加藤英樹
加藤英樹	II	三四	四	片	かたこと(方言書)	II	三四	四	加藤英樹
加藤英樹	II	三五	五	片	かたこと(方言書)	II	三五	五	加藤英樹
加藤英樹	II	三六	六	片	かたこと(方言書)	II	三六	六	加藤英樹
加藤英樹	II	三七	七	片	かたこと(方言書)	II	三七	七	加藤英樹
加藤英樹	II	三八	八	片	かたこと(方言書)	II	三八	八	加藤英樹
加藤英樹	II	三九	九	片	かたこと(方言書)	II	三九	九	加藤英樹
加藤英樹	II	四〇	〇	片	かたこと(方言書)	II	四〇	〇	加藤英樹

Table with multiple columns containing book titles, authors, and classification codes. Categories include カニ, カネ, カノ, カハ, カヘ, カホ, カマ, カカ, カフ, カメ.

Table with multiple columns containing book titles, authors, and classification codes. Categories include カメ, カム, カモ, カヤ, カユ, カヨ, カラ, カリ.

Table with 7 columns and multiple rows, listing various titles and authors under categories like カル, カレ, カロ, カワ, カン. Includes titles such as 假博士, 狩谷成賢, 花柳春路, 櫻井, 櫻井, 櫻井, etc.

Table with 7 columns and multiple rows, listing various titles and authors under categories like カン, カン, カン, カン, カン, カン, カン. Includes titles such as 假博士, 狩谷成賢, 花柳春路, etc.

Table with multiple columns containing book titles (e.g., 空也上人傳, 夢也念傳, クエ, クオ), authors, and classification numbers (I, II, III, IV).

Table with multiple columns containing book titles (e.g., 國史, 開方雙武, 國木田獨歩), authors, and classification numbers (I, II, III, IV).

Table of contents for the right page, listing titles and page numbers under various categories like 'コエ', 'コカ', 'コキ', and 'コケ'.

Table of contents for the left page, listing titles and page numbers under various categories like 'コク', 'コク', and 'コケ'.

五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一
コホ	一	コホ	一	コホ	一	コホ	一	コホ	一
五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一	五選會年九	一
...

...
...
...
...

Main index table on the right page, containing entries for 'サエ' (Sae) and 'サク' (Saku) with columns for title, author, and volume/page numbers.

Main index table on the left page, containing entries for 'サケ' (Sake), 'ササ' (Sasa), 'サシ' (Sashi), 'サセ' (Sase), 'サタ' (Sata), 'サチ' (Sachi), and 'サク' (Saku) with columns for title, author, and volume/page numbers.

Table with columns for author names (e.g., 薩摩傳, 薩摩夜車, 薩摩道), volume numbers, and page numbers. Includes sub-sections like サト, サテ, サマ, サノ, サハ, サヒ, サフ, サホ, サマ, サヨ, サユ.

Table with columns for author names (e.g., 小夜衣千太郎, 左翼新家庭, 小夜衣(中)), volume numbers, and page numbers. Includes sub-sections like サラ, サル, サレ, サロ, サワ, サノ, サハ, サヒ, サフ, サホ, サマ, サヨ, サユ.

Table of contents for the right page, organized by categories such as 詩集 (Poetry Collections), シン (Novels), シナ (Plays), シツ (Essays), and others. Each entry includes the title, author, and a code (e.g., 〇〇〇) for cross-referencing.

Table of contents for the left page, organized by categories such as シテ (Essays), シナ (Plays), シハ (Essays), and others. Each entry includes the title, author, and a code (e.g., 〇〇〇) for cross-referencing.

Table of contents for the right page, listing authors, titles, and page numbers. Authors include 四梅楼, 柴垣其文, 芝野丹南, etc. Titles include 暫, 私版, シヒ, 謝賦, シマ, シメ, シヤ, etc.

Table of contents for the left page, listing authors, titles, and page numbers. Authors include 釋迦八相物語, 寫物, 寫物集, 寫物集附錄, etc. Titles include 釋日本紀, 寂念, 寂然, シュ, シユ, etc.

Table of contents for the right page, listing titles such as '春色野咲の花' and '春色初雪之出' with corresponding volume and page numbers.

Table of contents for the left page, listing titles such as '松牛牧士' and '松花集' with corresponding volume and page numbers.

小説研究十六講	〇七	四	常徳夜話	〇六	三	昌琢	〇六	四	松亭仙	〇三	一	正徳の四家	〇九	三	高倉住来	〇七	三
小説字彙	〇五	三	消息	〇五	三	昌琢二十五回忌	〇四	一	松亭金水	〇五	一	正徳馬鹿轉	〇五	二	竹柏	〇五	三
小説史稿	〇三	三	裝束	〇三	三	遺書	〇三	一	松亭子	〇三	一	浄土五祖轉	〇三	一	竹白	〇三	一
小説字林	〇三	三	消息往来	〇三	三	小染子	〇三	一	松亭主人	〇三	一	浄土三祖轉	〇三	一	名聞百韻	〇三	一
小説神髓	〇二	四	消息往来	〇二	四	元	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土蘇宗	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説神髓拾遺	〇二	四	裝束温故抄	〇二	四	笑談醫者氣質	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土註	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説神髓	〇二	四	裝束甲冑圖解	〇二	四	橋本治要	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説神髓	〇二	四	消息詞	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説神髓	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説一夕話	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説比叢文	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説短編	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説家主人	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説由井清瀨	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説由井清瀨	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一
小説由井清瀨	〇二	四	裝束集	〇二	四	松竹堂	〇二	一	松亭集	〇二	一	浄土和讃	〇二	一	名聞百韻	〇二	一

正札附息貫	〇六	二	聲明書語	〇六	二	少婦入道百首	〇六	二	浮瑠璃大系圖	〇六	二	丈六庵一草	〇六	二	女官裝束繪文圖會	〇六	二
生佛	〇五	二	聲明書	〇五	二	松葉(五七)	〇五	二	浮瑠璃物語十二段	〇五	二	笑話	〇五	二	諸國圖	〇五	二
橋天問答	〇四	二	聲明書	〇四	二	松葉(七七)	〇四	二	浮瑠璃物語十二段	〇四	二	昭和詩文	〇四	二	書簡文(書翰)	〇四	二
小風流	〇三	二	聲明書	〇三	二	松葉(七七)	〇三	二	浮瑠璃物語十二段	〇三	二	昭和詩文	〇三	二	書簡文(書翰)	〇三	二
勝負分	〇二	二	聲明書	〇二	二	松葉(七七)	〇二	二	浮瑠璃物語十二段	〇二	二	昭和詩文	〇二	二	書簡文(書翰)	〇二	二
小文學	〇一	二	聲明書	〇一	二	松葉(七七)	〇一	二	浮瑠璃物語十二段	〇一	二	昭和詩文	〇一	二	書簡文(書翰)	〇一	二

Table of book titles and page numbers on the right page, including titles like '新編真言聲明', '心教紀行', and '新好色文枕'.

Table of book titles and page numbers on the left page, including titles like '心中鬼門角', '新編真言聲明', and '新風屋敷'.

Table of contents for the right page, listing titles like '新野問答', '新編陽炎巻', '新編水滸傳', etc., with corresponding volume and page numbers.

Table of contents for the left page, listing titles like '仁良書', '新涼苑句選', '人倫問答同集', etc., with corresponding volume and page numbers.

政治佳人の血涙	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

世界お伽文庫	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

撰特	雪直長五郎	雪直集	雪直集(二卷)	雪直集(三卷)	雪直集(四卷)	雪直集(五卷)	雪直集(六卷)	雪直集(七卷)	雪直集(八卷)	雪直集(九卷)	雪直集(十卷)	雪直集(十一卷)	雪直集(十二卷)	雪直集(十三卷)	雪直集(十四卷)	雪直集(十五卷)	雪直集(十六卷)	雪直集(十七卷)	雪直集(十八卷)	雪直集(十九卷)	雪直集(二十卷)	雪直集(二十一卷)	雪直集(二十二卷)	雪直集(二十三卷)	雪直集(二十四卷)	雪直集(二十五卷)	雪直集(二十六卷)	雪直集(二十七卷)	雪直集(二十八卷)	雪直集(二十九卷)	雪直集(三十卷)		
...

千載堂	全書例	千載和歌集	千載和歌集(二卷)	千載和歌集(三卷)	千載和歌集(四卷)	千載和歌集(五卷)	千載和歌集(六卷)	千載和歌集(七卷)	千載和歌集(八卷)	千載和歌集(九卷)	千載和歌集(十卷)	千載和歌集(十一卷)	千載和歌集(十二卷)	千載和歌集(十三卷)	千載和歌集(十四卷)	千載和歌集(十五卷)	千載和歌集(十六卷)	千載和歌集(十七卷)	千載和歌集(十八卷)	千載和歌集(十九卷)	千載和歌集(二十卷)	千載和歌集(二十一卷)	千載和歌集(二十二卷)	千載和歌集(二十三卷)	千載和歌集(二十四卷)	千載和歌集(二十五卷)	千載和歌集(二十六卷)	千載和歌集(二十七卷)	千載和歌集(二十八卷)	千載和歌集(二十九卷)	千載和歌集(三十卷)		
...

索引(ソエーソク)

Table listing various Japanese books and documents with columns for author, title, volume/number, and price. Includes entries like 早梅集, 俳諧引, 草風, etc.

索引(ソウ)

Table listing various Japanese books and documents with columns for author, title, volume/number, and price. Includes entries like 素庵(素庵), ソウ, 宋學, etc.

Table with columns for author names (e.g., 太平百物語, 大正の青年と帝), volume numbers (e.g., 一巻, 二巻), and page numbers (e.g., 1, 2, 3). Rows are categorized by author or title groups like '夕エ' and '夕カ'.

Table with columns for author names (e.g., 大正の青年と帝, 大東世説), volume numbers (e.g., 一巻, 二巻), and page numbers (e.g., 1, 2, 3). Rows are categorized by author or title groups like '夕イ' and '夕カ'.

Table listing entries under 'タキ' and 'タソ' categories, including titles like '竹葉新編', '竹取物語', and '竹内支那', with associated numbers and symbols.

Table listing entries under 'タタ' and 'タニ' categories, including titles like '忠臣蔵', '忠臣蔵', and '忠臣蔵', with associated numbers and symbols.

Table of contents for the right page, listing titles, authors, and publication details. Includes entries like '忠臣蔵', '忠臣蔵前代無双', '忠臣蔵心中行状記', etc.

Table of contents for the left page, listing titles, authors, and publication details. Includes entries like '千代田歌集第一巻', '千代田歌集第二巻', '千代田歌集第三巻', etc.

Table of contents for the right page, listing titles, authors, and page numbers. Includes sections like ツレ, テア, テイ, テニ, テフ, テマ, テラ, テル, テリ, テン, テカ, テク, テキ, テコ, テサ, テシ, テス.

Table of contents for the left page, listing titles, authors, and page numbers. Includes sections like テア, テイ, テニ, テフ, テマ, テラ, テル, テリ, テン, テカ, テク, テキ, テコ, テサ, テシ, テス.